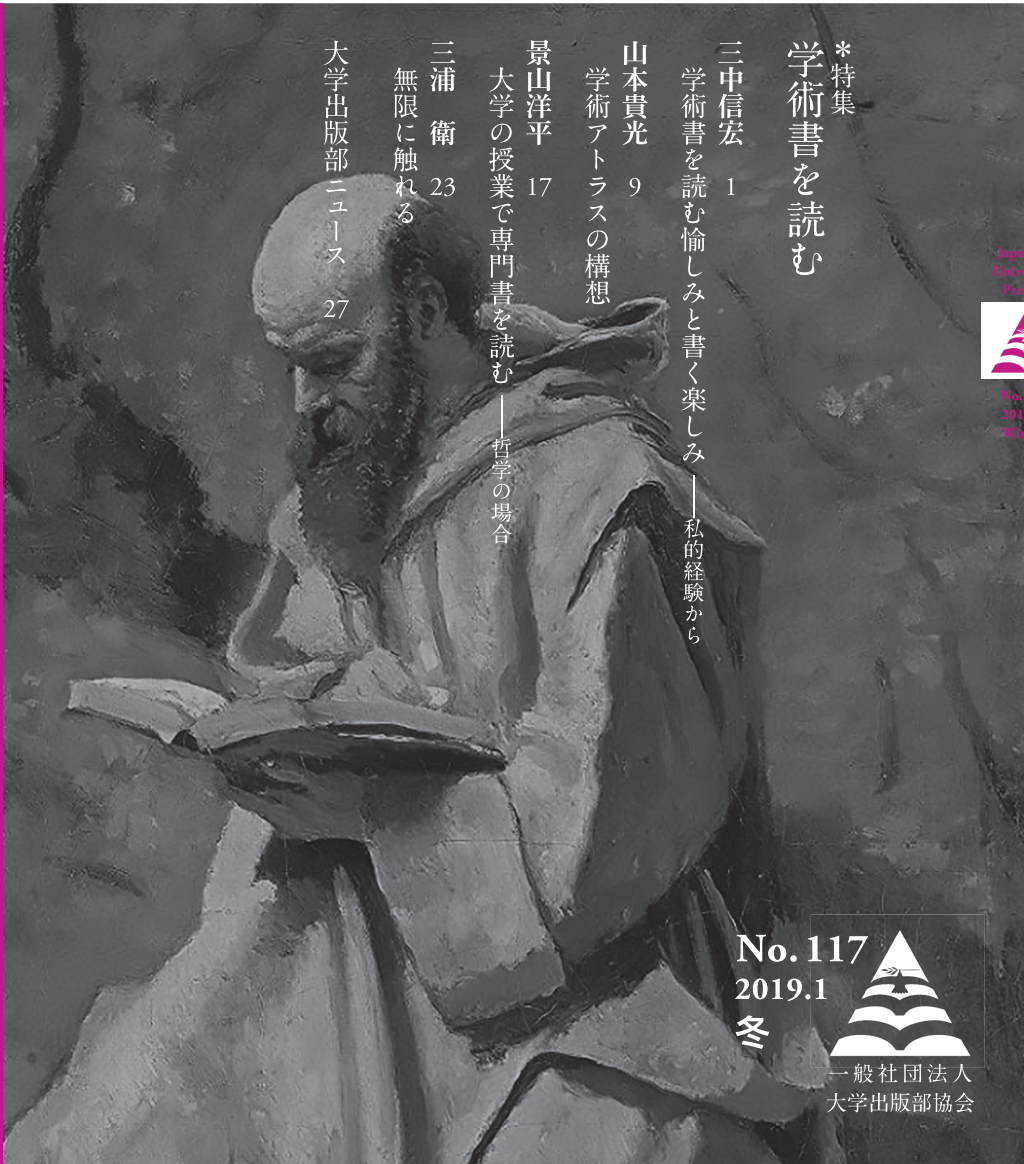
大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES



＊特集
学術書を読む

三中信宏　1
学術書を読む愉しみと書く楽しみ ――私的経験から

山本貴光　9
学術アトラスの構想

景山洋平　17
大学の授業で専門書を読む ――哲学の場合

三浦　衛　23
無限に触れる

大学出版部ニュース　27

No. 117
2019.1
冬

一般社団法人
大学出版部協会

大学出版部協会　新刊ご案内

ブックレット第4弾

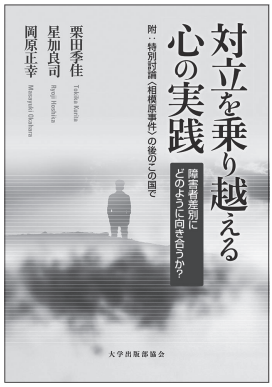
対立を乗り越える心の実践

障害者差別にどのように向き合うか？

栗田季佳・星加良司・岡原正幸

大勢の障害者の命が奪われた〈相模原事件〉を起こす影は，私たちの内にある．制度や「ねばならない」的教導では，差別はなくならない．「潜在化する偏見」を炙りだし，その原因となる心のメカニズムと社会的背景にまで遡って考察することで，差別解消への糸口を考える．

［発行：大学出版部協会／発売：東京大学出版会］



ISBN978-4-13-003153-0　2017年2月刊行
A5判／88頁／本体1,000円＋税

主要目次

第１章　見えない偏見
障害者を取り巻く問題に現れる心の動き　（栗田季佳）

第２章　バリアフリーという挑戦
「社会を変える」ことは可能か　（星加良司）

第３章　生の問題として〈対立を乗り越える〉を考える　（岡原正幸）

第４章　討論
対立を乗り越える学問の挑戦　（栗田季佳・星加良司・岡原正幸）

第５章　特別討論〈相模原事件〉の後のこの国で
有事モード下の差別と偏見

特集＊学術書を読む

学術書を読む愉しみと書く楽しみ——私的経験から

三中信宏（農業・食品産業技術総合研究機構専門員）

本を「読むこと」と「書くこと」は表裏一体

私は、常日頃の仕事柄、いくつもの学問分野にまたがる本を広げることが多い。それらの本はこの特集の主役である専門的な「学術書」だったり、あるいはもっと広い読者に向けた「一般書」だったりする。さらに、私の場合、本を読むだけではなく、本を書く機会もある。過去に新書の形式で本を出版したときは（三中 二〇〇六、二〇〇九）、巻末に文献リストと索引を必ず付けるようにした。私の想定している学術書とは「レファレンスとして参照できる書籍」というやや広い意味をもつ。その点から言えば、私がこれまで出した新書は、その体裁とは裏腹に、ハードカバーの専門書と同等の学術書としての体裁を取っている。

一方、日本の出版業界では、文献リストや索引を伴わない新書や文庫が少なくないが、それらは参考資料としての価値がまったくない。また、翻訳書の場合、原書には詳細な注や文献リストそして索引が付けられているのに、翻訳に際してそれらがすべて削除されてしまうこともある。これもまたレファレンスとして無意味になってしまうので、必要に迫られてわざわざ原書を買い求めるという二度手間になってしまうことも少なくない。学術書にかぎらず、本の情報内容は本文にだけあるわけではない。

専門分野を掘り下げた学術書（その定義が何であれ）は断片的な知識を超えた体系的なまとまりを読者に提示している。レファレンスとして役割を担う学術書をひもとくとき、読者の側にはあるまとまった〝知識の体系〟について知りたいという動機がきっとどこかにあるだろう。最新の〝知識の断片〟を知りたいのであれば、専門的なジャーナルの原著論文を参照すれば事足りる。しかし、あえて学術書を手に取る読者はもっとちがうものを求めている。『学

術書の編集者』の著者・橘宗吾はこう述べる。

知識に情報としての側面があることを否定するつもりはありませんが、知識には、それを身につけようとすることによってその体系性・全体性に触れ、その全体を隅々まで知らないままそれを経験するという側面もあるでしょう。（橘二〇一六、一六頁）

断片としての論文と体系としての書籍とを対置させるとき、両者の果たすべき役割のちがいを知らねばならない。そもそも学術書を出版することにどのような学問的意義があるのか。学問分野ごとの文化のちがいを反映した研究者コミュニティーのなかでの専門書の位置づけの変化である。二〇世紀末の科学における成果主義と競争原理のもとでは、研究活動のアウトプットとして専門的な出版物を出し続けなければ生き残れない傾向がますます強まっている。自然科学系のある分野では確かに原著論文だけが重視され、その反動として書籍が軽視される風潮がきわめて強い。橘は言う。

（電子ジャーナルを主とする）自然科学系の学問モデルの規範化が学術の世界全体で進み、それによって生じたのが、後述する、論文概念の無差別化・一般化と論文中心主義の全域化であり、書籍の軽視です。そこでは書籍は、こうした論文の束か、長めの論文だと見なされ、もしそうでないとしても、論文で書かれた内容を希釈した二次的な文章が掲載されるものと見なされる傾向が生まれます。そして論文がすべてそのまま電子化されるならば、紙の学術書にはもはや用がないか、二次的なものにすぎない。しかし、それは違う、というのが本書の考えです。（橘二〇一六、一五頁）

研究成果としての学術書をたとえ出版したとしても読まれない状況ははたして打開できるのか。学術書をとりまく厳しい状況をふまえて、『学術書を書く』の著者は次のように宣言する。

それでも研究者として評価されるためには、「Publish」の営みを続けなければならない。とすれば、「Publish」そのもののあり方を根本から見なおして、真に意味のある出版をしようではないか。学術書の書き方を考えることは、そのために大いに役に立つ、というのが本書の提案です。（鈴木・高瀬二〇一五、一一頁）

自然科学系の研究分野では、紙の出版物から電子出版物への移行は一九九〇年代に入って急激に進んだ。それと同時に、出力される論文の内容がどんどん専門化・狭隘化してきた。その結果、学術的な出力（アウトプット）は断片

としての学術情報とみなされるようになっている。学術書よりも専門ジャーナル論文が重視されてきた自然科学では、学術情報という言葉にあまり違和感はない。

しかし、「情報には作者は存在せず、読者もまた存在しない」（橘 二〇一六、一八頁）という指摘からもわかるように、科学の断片的情報だけに目を奪われると、体系的知識をひとつのかたちとして具現する学術書は視野にまったく入ってこなくなるだろう。学術書を読む意義が失われれば、学術書を書く意欲もまた薄れてしまうにちがいない。専門的知識を体系化する場としての学術書を「書くこと」と「読むこと」は表裏一体の関係にある。

知識の「断片」と「体系」——学術書の存在意義

学術的な「知識」がひとつのまとまりとしての体系（システム）をつくり得るとすると、それを薄く細分化した「情報」の断片との差異は明白だ。私が知っている範囲でも、最近の学術書の電子本のなかには、たとえ全体として単著であっても、各章ごとに〝切り売り〟されていることが少なくない。本全部ではなくどこかの章だけ買うとき、一冊の本としてのまとまりはすでに求められていないということだ。そのような読み方がさらに広がるようであれば、そもそも本の読み方の基本スタイルそのものが変質しつつあるということではないだろうか。

体系的知識としての学術書の意義について考えるとき、断片ではないひとまとまりの体系としての「知識」はなぜ必要とされるのかに目を向ける必要がある。

もともと専門外の分野に目配りするスタイルがあれば問題ないのだが、そういう姿勢を持ち合わせていない読者をいかにして呼び込むか。本造りの側からの「二回り外、三回り外の専門家に向けた本」（鈴木・高瀬 二〇一五、一三頁）という戦略はきっと効果的だろう。視界から見えなくなってしまった読者を取り戻し、さらには偶然手にとった読者をも引き込むような学術書はきっと造れるはずだ。

ただし、ここには高い関門が立ちはだかる。学術書を書く著者とそれを出版する版元がいくら頑張っても、それを受け入れる読者層をどうすれば掘り起こすことができるのかという問題だ。サラミのような薄切りの〝断片〟的な知見をアウトプットし続ける研究者にとっては、ごく狭い範囲の最先端の知識さえあれば日々の仕事には事足りるだろう。あえて、遠くを見渡したり、歴史を振り返ったりする必要性を感じないとしても不思議はない。

『異分野融合、実践と思想のあいだ。』（京都大学学際融合教育研究推進センター 二〇一五）のなかで、著者の宮野公樹はこの点に深く関わる指摘をする。

> そもそも、学問の細分化は歴史的なもの。今の学術界は、数世紀をかけて現在の形態になった。それを無視して「重層化する課題解決には分野融合が必要」と一

言述べたところで、歴史によって積み重なった学術界の形態が一瞬で変わるわけがない。本当に〝分野融合〟を推進したいのであれば、現状にいたる〝分野分裂〟に要した時間と同等かそれ以上の時間をかけなければならないだろう。（六九頁）

個々の学問分野は時空的な進化体なので、科学の歴史の中でどのように変遷・分裂・消滅・融合するかは、著者が正しく指摘するように、おいそれと変更できるものではないだろう。さらに論を進めるならば、異分野をまたぐ動機づけは必ずしも研究者コミュニティー全体の動きだけではなく、そこに属する個々の研究者の動機づけにもつながっていけばとても有効だろう。そのためには、研究者ひとりひとりが自らが属する研究分野（および周辺関連領域）の歴史的変遷と科学社会学的動態を〝枠組み〟として正しく認識する必要があるのだろう。時間的にも分野的にも広がりをもつ科学といういとなみを想像する力が必要だろう。しかし、残念ながら、科学史や科学哲学の素養のない（大半の）研究者にはそれを期待できないところに問題が残るかもしれない。

知的アンテナの張り方——私的体験から

冒頭に書いたように、私は学術書を読んだり書いたりする研究者人生を送ってきた。以前、ある大学でセミナーを開催したとき、「三中さんが本を書かれるときは読者層に合わせてどのように書き分けられているんでしょうか？」という質問があった。すかさず「私は自分のためにだけ本を書いているので読者のことを意識したことはまったくありません」と答えた。場が一瞬ざわめいたが、よくよく考えてみれば、私は誰かのために本を書いたことはこれまでまったくないと断言できる。

「自分が読みたい内容の本を自分で書く」あるいは「自分があとでレファレンスとして利用できる本を自分で書く」——本の〝かたち〟がハードカバーの専門書であっても新書の学術書であっても、私の基本方針はゆるがない。私の本を手にした読者のなかには「新書なのに難しすぎる」と感じる〝被害者〟がときどきいることは承知しているが、すみません、口に合わなかったということでご容赦を。私の書いた本は私が読者だ。ひょっとして他人が私の本を手にして「おもしろかった」とか「役に立った」と思うのであれば、それは私にとっては文字通り〝望外の喜び〟であり、最初からそれを狙ったわけではない。

私が本を書いたり読んだりするときは、自分の〝アンテナ〟をどこまで伸ばすことができるかのトレーニングであると心している。もちろん、自分が勝手にそう思い込んでいるだけの〝ホームグラウンド〟の内側なら、つねに前方にある最先端に向かってのみアンテナを張ればいいかもしれない。しかし、いったん横や後ろに関心を向けるとなる

と、どこまでアンテナを伸ばせばいいのか、どれくらいの網の目の細かさにすればいいのかを試行錯誤しながらやってみるしかない。

私の専門分野は生物体系学だ。この分野は歴史的にみれば、一見畑違いの歴史言語学や写本文献学あるいは考古学や先史学のような歴史学との接点がいくつも見出されるので、分野の〝壁〟を超えたつながりは調べ始めるときりがない（三中 二〇一八）。さらに、この分野は研究者コミュニティーとしての科学社会学的動態もたいへんアクティヴなので、これから新たな異分野との〝連携〟や〝融合〟の契機もさらに広がりそうだ。おそらく、他の研究分野でも同様のシーズなりニーズは水面下にまだまだたくさん潜んでいると思われる。だから、研究者個人が活動しているいまの研究分野を超えて他のどの分野と〝連携〟や〝融合〟を目指せばいいのかという最初の一歩を踏み出してみる気合が必要だろう。

自分のホームグラウンドを超えて他分野の学術書にアンテナを伸ばすとき、私自身が心がけていることはふたつある。

第一に、「本は余さず読み尽くす」ことだ。本やジャーナルを〝丸ごと〟読み尽くすことには意義があると私は信じている。だが、本を丸ごと読まないという残念な傾向は、一般読者も研究者もちがいはないようだ。本ではなく単なる活字の「情報」であれば、さまざまなソースからたくさん〝摂取〟しているだろう。しかし、研究者であっても、自分の専門分野の「本」を丸ごと――すなわち「序文・目次から索引まで」ということ――読まないことが多くなってきたのではないか。専門書の電子本でも各章ごとの〝切り売り〟さえ見られる現状ならけっして意外なことではない。専門分野のジャーナルだって、いまは論文ごとの〝切り刻み〟をＰＤＦにしてばらまいているようなものだ。まるで取扱説明書やマニュアルの拾い読みみたいに、必要最低限の知識断片を拾い読みですませてよしとする風潮が広がっている。

◆このテキストなら、きっとわかる

松坂和夫 数学入門シリーズ 全6冊

著者が数多く著した優れた入門書の中から、高校数学までの知識をもつ人が現代数学の基本概念をひととおり学べるように、書目を選んでシリーズ化し、新装版として刊行します。自習書として最適です。

1 集合・位相入門 2600円
2 線型代数入門 3400円
3 代数系入門 3400円
4 解析入門（上） 3400円
5 解析入門（中） 3400円
6 解析入門（下） 3400円

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
（定価は表示価格＋税）
http://www.iwanami.co.jp/

学術ジャーナルのインパクト・ファクターや研究者のh-indexからは、ある論文がどれくらい「引用されたか」を定量化することはできても、どれくらい「読まれたか」は見えてこない。その一方で、最近のジャーナルは、読者が「論文を全部読まなくてもいいような技法」を次々と繰り出している。たとえば、アブストラクトと図表だけピックアップしたり、めんどうなmaterials and methodsは小さい活字にして末尾に追いやったり、研究の詳細はonline supplementsに封印したり。「論文が読まれなくなっている」のは当然の帰結ではないだろうか。論文を丸ごと読むのではなく、必要部分だけを切り出して〝情報摂取〟すればいいという風潮は読む側にも読ませる側にも広がっている。本や雑誌の必要箇所だけを拾い読むことは情報摂取ではあってももはや読書とは呼べない。

第二に、「本を読んだら必ず書評を書くこと」である。読み終えて「これは！」という本だったら、私は備忘メモかたがた短くない書評文を書き、二〇〇五年以来一四年も続けている私の書評ブログ（三中信宏 二〇〇五－二〇一八）を通じて公開するように心がけている。最近書いたいくつかの書評記事について文字数をカウントしてみると、短いのは一五〇〇～二〇〇〇字くらい、長くなると三〇〇〇～四〇〇〇字ほど書いているようだ。一方で、日本の多くの新聞・雑誌の書評欄では、書評文化の伝統なのだろうか、長い書評記事を読む機会がほとんどない。私がいつも目を通している欧米の専門誌――たとえばSystematic Biology誌やCladistics誌――だと、刷り上がりで一〇～一五ページもある長大な書評論文が珍しくない。そういうのと比べれば日本の書評は足元にも及ばない。

いずれにしても本を読み終えたら書評文を書こう。ネットでは自分が買った本のリストをただ並べているだけのサイトも少なくない。そうではなく、読み終えた本からどんな点でインスパイアされたのかとか、どこに異論があるのかを書き記せば、自分のためにも、他人のためにもなるだろう。私は自分の本に関する書評や感想記事を集めて「頻度分布」を構築するようにしている。すると、多くは匿名の書評者たちがどの程度の本を「読む取る力」があるのかが透けて見える。書評者たちは、自分が書く書評文の集積（＝書評者ごとの「周辺分布」）を通して、逆に評価されているということだ。匿名だからといってあることないこと書き散らしていればまちがいなく〝天罰〟が下る。ネット社会の書評文化はそうそうお花畑ばかりではない。

本を書く心がまえ――逆風に立つ研究者＝書き手

研究者がまとまった時間をもてないことは、日々走り続けているときはえてして自覚されにくい。眼の前にぶら下がっている仕事を追いかけ回しているうちに気がつけば一日が終わっている。そういうあわただしい日常が長期間累積されて、ある日ふと気づくわけだ――「私はいったい何

やってんだろう？」って。

日本の大学教員は多忙すぎて専門分野の教科書を書く時間がなく、彼我の格差をさらに広げているらしい。この点は国研の研究員だって同等だろう。一年間に及ぶ長期のサバティカル休暇をもらって本を書く海外の研究者の事例を見るにつけ、日本の職場環境でサバティカルがとりづらいことが大きな本の執筆時間を確保できない要因であることは明白だ。まとまった文章を書いたり、しっかりものを考えたりするのに、細切れの時間ではどうしようもない。私のように長期の夏休みもサバティカル制度もない国研研究員が本を一冊書くことは綱渡りを続けるようなものだ。なぜなら、その代償として、他の多くのものを放り出しているわけで、その〝逆風〟に耐えられないと本は書けない。

大学にせよ国研にせよ、現在の研究者が置かれている状況をかんがみると、学術書を含め「本を書く環境」それ自体はさらに悪化しているようだ。職場としての〝糊しろ〟や〝溜め〟を保証する人員あるいは資本（資金）が経年的にやせ細ってきたので、かつてはあったはずの「深いフトコロ」がどんどん埋め立てられている気がする。だから、教員や研究者が「本を書くこと」の代償やリスクは以前よりも格段に大きくなっているのかもしれない。代償はとても高いけど、それでもあえて本を書くという覚悟が必要な今日だ。個人の業績評価では当然のことながら査読付きペーパーが重視される。査読論文を書きながら単著本も書けというのは「二人分生きろ」ということと同じだ。

この事情は翻訳書にもそのままあてはまる。海外のすぐれた学術書を日本語に翻訳することは確かに意義があるだろう。しかし、いまの研究者にそういう翻訳なんかしている時間はきっとないだろう。時間と手間をかけて翻訳書を出したからといって、現在の業績評価システムの上ではほとんど何のプラスにもならないからだ。もうひとつ問題なのは、翻訳の価値がある本があったとしても、翻訳によって得られる読者側の利得と、翻訳するのに必要な訳者側のコストとの不均衡があまりにも大きいという点だ。ちゃん

日本人は、何を、何のために、どのように食べてきたか？

日本の食文化

全6巻刊行開始　各2700円

小川直之・関沢まゆみ・藤井弘章・石垣　悟　編

1 食事と作法

小川直之編　儀礼と日常の食の社会的な意味を読み解く。（第1回）

〈続刊〉2 米と餅…関沢まゆみ編 3 麦・雑穀と芋…小川直之編 4 魚と肉…藤井弘章編 5 酒と調味料、保存食…石垣　悟編 6 菓子と果物…関沢まゆみ編　『内容案内』呈

平安宮廷社会が甦る藤原実資の日記

現代語訳 **小右記** 全16巻刊行中

7 後一条天皇即位（第7回）

長和4年(1015)4月―長和5年(1016)2月

倉本一宏編　3000円

海底に眠る蒙古襲来 水中考古学の挑戦

（歴史文化ライブラリー 478）

池田榮史著　謎に挑む臨場感あふれるレポート！　1800円

近代日本の思想をさぐる

研究のための15の視角

中野目　徹編　生みだす場、伝える素材、分析する枠組み…。思想史の世界へと誘う。　2400円

民俗伝承学の視点と方法

新しい歴史学への招待

新谷尚紀編　柳田・折口の民俗学創生の思想を受け継ぎ、発展させた「民俗伝承学」を提唱。9500円

〈東京オリンピック〉の誕生 一九四〇年から二〇二〇年へ

浜田幸絵著　「国際」と「グローバル」をキーワードに、連続性に着目しメディア史から描く。3800円

日記と歴史百科が1冊で便利――

歴史手帳 2019年版　950円

吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8

電話03-3813-9151／価格は税別

と訳せて当然、クォリティーの低い訳文だと容赦なく叩かれるという境遇に自ら進んで身を置きたい研究者は、よほど奇特な人を除けば、ほとんどいないと思う。それでもやるとなったら、手練のプロの翻訳者と共訳するのが現時点ではベストのやり方ではないだろうか。

私が一冊の本を書くときは、読者にも（場合によっては編集者にさえ）わからないような伏線をそっと張り巡らすのを愉しみにしている。一部分だけ拾い読みしたのではけっしてわからないように。それは利己的な書き手だけの悦楽である。私の場合、たとえ学術書であっても、微かな伏線をペダンティックな引用文に埋めることもあり、本文中の文章に埋め込まれていることもある。場合によってはカバージャケットのウラ側に本質が潜んでいることもあり、隅から隅までちゃんと読まないとわからないようにしている。一度だけ、絶対にわからないはずの伏線を見つけてしまった書評者がいて、あのときは震え上がった。目利きの読者はいるところにはちゃんといる。そういう練達の読者が世の中のどこかにいることは、本の書き手にとってはいささかぞくぞくする快感にもつながる。

論文と本では流れる時間がもともと異なっているので、論文を書くときの「微分主義」的な研究者スタンスとともに、本を書くときの「積分主義」的な研究者人生観をあわせもつ必要がある。研究者としてキャリアが存続するかぎり、累積的な「積分範囲」はどんどん大きくなり、結果として自分の立ち位置を鳥瞰できるようになる。しかし、年を取ってしまってから懐古的に「守りの本」を書くよりも、まだ自分がどうなるかわからないときにしか書けない「攻めの本」の方がワクワク感がきっと高い。そういう本を書けるチャンスがある若い世代の研究者は機会を逃さず書いてほしいと思う。

文献リスト

京都大学学際融合教育研究推進センター 二〇一五『異分野融合、実践と思想のあいだ。』京都大学学際融合教育研究推進センター

三中信宏 二〇〇六『系統樹思考の世界――すべてはツリーとともに』講談社

三中信宏 二〇〇九『分類思考の世界――なぜヒトは万物を「種」に分けるのか』講談社

三中信宏 二〇一八『系統体系学の世界――生物学の哲学とたどった道のり』勁草書房

三中信宏 二〇〇五－二〇一八 leeswijzer: een nieuwe leeszaal van dagboek URL https://leeswijzer.hatenadiary.com/

鈴木哲也・高瀬桃子 二〇一五『学術書を書く』京都大学学術出版会

橋宗吾 二〇一六『学術書の編集者』慶應義塾大学出版会

特集＊学術書を読む

学術アトラスの構想

山本貴光（文筆家・ゲーム作家）

書物の数はたえず増大していき、人々は書物の氾濫にうんざりする。――ライプニッツ「諸学問を進展させるための格率」

学術

学術とは、この世界、森羅万象についての未知に迫ろうとする営みである。

森羅万象のうちには、宇宙や地球といった私たちにとっての世界、そこに存在する大気や水、動植物や鉱物、それらを構成する元素や素粒子、こうした諸物が起こす変化といった自然もあれば、人間が生み出す各種の道具や制度や文物や出来事などの人文や社会にかかわるものもある。学術とは、それがどのようなものであるかを学び、問い、調べ、解明し、記述しようとする営みである。

日本語の「学術」という言葉は比較的古くから用いられていたようだ。『日本国語大辞典』（Japan Knowledge 版）によれば、八世紀頃の用例（『続日本紀』養老六年二月戊戌）がある。ただ、現在のような意味、つまり「学問と技芸術」の略称として広く使われるようになるのは、西洋文化を移入して学んだ明治期以降のこと。Sciences and Arts に対応する訳語として新調しなおされて今日に至る。

いまでは「サイエンス」といえば、もっぱら自然科学を指すことが多い。もとを辿ればラテン語の scientia、知ること、知識に由来して学問一般を指していた。また、現在「アート」といえば、もっぱら美術や芸術を指すけれど、語源であるラテン語の ars は、なにかをつくることを意味する。つまり、知ることとつくることを指していた(1)。

既知と未知の境界

学術は、基本的にはなんらかの対象について、これまで

人類が解明できていない謎、問いをめぐって営まれる。宇宙を構成する究極の素粒子はなにか、気候変動はどのようなメカニズムで生じるのか、脳からいかにして意識が生じるのか、素数を一般的に表すにはどうしたらよいか、すべての言語に共通の普遍文法は存在するのか、などなど。

対象を問わず、学術は人類にとって既知と未知の境界で営まれるダイナミックなものだ(2)。学術論文や学術書には、そうした営みの成果があらわされている。ここでは両者を併せて「学術文献」と呼ぶことにしよう。ある領域の知を整理して伝える本もあれば、これまでに発表された論文を集めた本、新たに発見された事実、あるいは仮説や解釈などのアイデアを表した本もある。

そこで、なにごとかについて人類がこれまで知り得てきたことを確認したい場合、学術書や学術論文を探し集めて読むことになる。そこではある対象について問いを立て、これまでの研究で明らかにされてきたことを要約し、そこでまだ明らかではない点について探究した結果が示される。

学術書には、このように既知を広く調査して整理・圧縮する機能をもつものがある。こうした知識の圧縮機能は、後から訪れる者にとって、ものを学んで考える効率をぐっと高めてくれるわけである(3)。なにかものを知りたいと思うとき、学術書はおおいに頼りになる所以である。また、現在ではインターネットを通じて、世界中の学術関連の各種アーカイヴやデータベースも利用できるので、適切に検索さえすれば、自分が関心をもっているテーマについての文献リストも手軽につくることができる(4)。

学術アトラス

さて、そのような学術書について、私は一利用者としてある希望を持っている。以下ではそれについて書いてみる。

いまから述べるのは、これまで構築されてきたインターネットの仕組みとその上に蓄積・公開されている各種学術文献のアーカイヴやデータベースを基本として、これを拡張する仕組みのアイデアだ。これをさしあたって「学術アトラス」と呼んでおこう。また、以下では実現可能性をあまり考慮せず、アイデアを広げることを目指す。

まず、仮に過去から現在まで世界中で刊行された学術文献の全体があるとする。ここで「全体」とは、言語や時代や発表媒体を問わず全てという意味だ。もちろん「学術文献とはなにか」という定義次第で、その全体も変わってくるだろう。だが、ここでは定義をせずに話を進める。というのは、それ自体、後から設定を変更できるようにすればよいと考えてのこと。

過去から現在までの学術文献の総体には、要するに人類全体がこれまで明らかにしてきた森羅万象にかんする知が集まっている。もちろんそこにはすでに間違いであることが明らかになった仮説や、まだ決着していない論争中の仮説なども含まれている。この学術文献全体について、人間

の身の丈でこれを一望、操作できるような学術アトラスを使いたい。これが私の希望である。

「人間の身の丈で」というのは、長くて百年ほどの寿命をもち、いまいる場所に知覚が限られ、同時に複数の文章を並行して読んだりできず（交互になら読める）、コンピュータに比べて記憶もあいまいで限られており、時に思い込みで間違いを犯すような認知バイアスまみれで、文章を書くにも同時に一つしか書けず、使える言語にも語彙にも限りがあり、やる気が湧いたりなくなったりするような気のムラがある、そんな人間の身で、という意味である。

というのも、コンピュータで論文や電子書籍、あるいは音楽や映画などのデータを自分で保管・整理してみるとつくづく痛感されるのだが、データ（ファイル）の件数が四桁を超えるあたりから見通しが悪くなり、五桁ともなるともはやなにがあるのか把握するのも難しくなる。物理的にも限られたディスプレイの表示領域では一望できず、それゆえ心理的にもマッピングしづらい[5]。

これが例えば通い慣れた図書館や書店、自分の書棚であれば、空間や相互の位置関係によって把握できる。大きくは「この辺りに物理学、こちらには音楽、その隣は映画」という具合に位置と分類の対応があり、それぞれの棚にはまた一定の秩序があって、何度か利用するうちにマップが記憶に収まりもする。現行のコンピュータで実現されているデータ管理方式は、この点が必ずしも十分ではない。

他方でコンピュータでは、データを保存しておく記憶容量さえあれば、十万件でも百万件でも扱える。しかしこれは人間の身の丈を超えている。だから悪いという意味ではない。個人が使うコンピュータでそれだけ厖大なデータを扱えるのはよい。ただ、それらのデータを検索したり、閲覧したりする装置とその装置を使う人間が、そうした事態に対応しきれずにいるのではないかと思う。

いや、自分に必要なデータを探して目を通すだけなら、さほど問題はない[6]。いま述べたような状況で困るのは、そうしたデータの全体を眺望したり把握したいと考える場合だ。学術文献全体を一望したり、自在に操作したいと考える場合、目下の情報環境では足りない。なぜならそれはすでに一人の人間の身の丈をはるかに超えているからだ。というのが述べたかったことである。

身の丈にあったインターフェイス

では、どうすればよいか。学術アトラスはどのようなものであればよいか。一方には学術文献全体がある。仮に全部で一億件の文献があるとしよう。この文献全体を知るには目を通すしかないが不可能だ。どのようにかして、目を通せる状態に変換する必要がある。

かつてそうした試みがさまざまになされてきた。百科全書はそのひとつ。もとはEncyclopediaで、かつて西周はこれを原義に遡って「百学連環」と訳した。現在では「百科

事典」と訳されることが多い。その歴史を辿るとエンサイクロペディアとは、学術情報を要約・集積することを目指した本であった様子が窺える。そこでは理想的には、諸学術において人類が明らかにした知識が分類整理して提示されている。現在でも各種の百科事典が編まれているが、それ自体が本にして二〇巻、三〇巻に及ぶ大著であることが多い。また、かつてドイツの大学やそれに倣った他国の大学では、エンツィクロペディという講義が行われていた。これはある分野を学ぶ際、学術全体のマップを示し、そのなかに当該分野を位置づけ、またその分野全体のマップを聴講者に示す、そのような内容であった。

こうした学術のマップを現在のコンピュータとインターネット環境を用いてつくるとしたらどうするか。私が思い描いているのは、グーグルマップのように利用者が、必要に応じて「距離」を調整できる学術アトラスである。

グーグルマップでは地図を、世界全体が目に入る縮尺から都市やその一区画が詳しく見える縮尺まで、さらには通りに降り立ってそこから見える光景を写真で示すストリートビューという仕組みを備えている。利用者は使っているハードに応じた操作法で、その地図に対して高度を変えるようにして近づいたり遠のいたりできる(7)。

この方式のよい点は、利用者が選んだ縮尺に応じて提示される情報の細かさと粗さも変化するところにある。例えば、世界全体が見える縮尺では、日本、大韓民国、中華人民共和国、モンゴル、ロシアといった国名だけが表示される。もう少しズームインすると、日本海や東シナ海といった海域名が、さらにズームインすると東京、名古屋、大阪といった都市名が、さらに近づくと河川や山などの地形、線路や幹線道路が見えてくる。といった具合である。

学術アトラスでは世界全体にあたるのが「学術」という大分類である(8)。少しズームインすると、「学問（Sciences）」と「技芸術（Arts）」という二つの分類群が見えてくる。「学問」にズームインすると「自然科学（Natural sciences）」「社会科学（Social sciences）」「人文学（Humanities）」の三領域が、「自然科学」に近づくと「物理学」「化学」「生物学」「医学」が……という具合に徐々に細かくなってゆく。ストリートビューの具体的な道や場所に対応するのが学術文献であり、さらにはそうした学術文献を構成する概念や語彙である。

と、描写してきたが、右に述べた分類に違和を覚える向きもあるだろう。そもそも学術をどのように分類するかということ自体が検討すべき課題である。また、分類という営み自体が、特定のものの見方の適用である以上、普遍的な分類、つまりどの時代の誰が考えてもそうなるという分類がありえないとすれば、分類の仕方は複数あってよい。

例えば、現在の大学や学会などで行われている分類もあれば、古来さまざまに提示されてきた分類もある。デカルトが学術全体を一本の樹にたとえた分類や、フランシス・ベーコンやそれを踏まえた『百科全書』における人間の精

神機能に応じた分類、アンペールによる自然に関する諸学と人間精神に関する諸学という二分から始まる分類体系など[9]。これらは人間による分類だが、他にも学術書のテキストデータを材料として語彙や推論方式の類似性など、各種パターンをアルゴリズムで抽出する手もあるだろう。

こうした分類の条件については、この学術アトラスではこれまで学術史上で提案されてきた各種分類を選択肢として用意する他、利用者が条件を設定できるようにしたい。要するに、一方には材料となる学術文献全体のデータがあり、他方にはそれを分類・階層化するアルゴリズムがある。

ここでポイントは、利用者の知識レヴェルや興味関心の所在に応じて、表示する学術アトラスの詳しさを調整できるようにすることだ。私は馴染みのない土地の地図を見るとき、いきなり細部に満ちた詳しいものを見るより、数は少なくて大まかでもいいから、あたりをつけられるような目立つものを知りたいと考える。あるいは何度も訪れて経験を重ねている土地であれば、地図の詳しい情報も見分けられるだろう。要するにここで考えている学術アトラスでは、利用者が一度に捉え切れない厖大な学術文献について、見当識を持ちながら、つまり全体のどこを自分が見ているかを自覚しながら、把握できるようにしたいわけである。

知の連環を明示する

また、要素同士の関係も比較的少ない操作で明らかにできるようにしたい。その仕組みを説明するために、まず学術アトラスを使わない場合の調べ物の例を書いてみよう。

例えば、ローレンス・プリンチーペの『科学革命』（丸善出版）を読んでいたところ、コペルニクスの『天球回転論』への言及があった。その原文を見たいと思い、まずは邦訳の『完訳 天球回転論』（高橋憲一訳、みすず書房）を書棚から取り出して読む。原典も見比べたいのでインターネットで探すと一五四三年のラテン語版 De revolutionibus orbium coelestiu を閲覧できる。Japan Knowledge の『羅和辞典』（研究社）や Perseus のラテン語辞書、必要に応じてオックス

子ども文庫の100年
子どもと本をつなぐ人びと
髙橋樹一郎　自宅を開放した子どものための図書室は、全国に何千と広がった。その全体像をみせる、はじめての本。 ¥3000

農家が消える
自然資源経済論からの提言
寺西・石田・山下編著　日本の国土となりわいが危ない。持続可能な地域・食料・エネルギー利用とアジア環境共同体構想。¥3500

ホロコーストとアメリカ
ユダヤ人組織の支援活動と政府の難民政策
丸山直起　ナチスドイツを逃れ自由の国に入ろうとするユダヤ人難民に、合衆国はどう対応したか。迫真の研究＝物語。¥4600

バウハウスの人々
回想と告白
ノイマン編　伝説の造形教育学校バウハウス。そこに学んだ54人の証言を収めた唯一の資料。創立百年。向井・相沢・山下訳¥8200

新版 現代日本法へのカタバシス
木庭顕　民事法こそは法のコア。ローマ法の碩学が現代日本の経済と社会を根底から問う。組合論・委任論他所収、大改訂。¥7800

日本の精神鑑定 増補新版
重要事件25の鑑定書と解説 1936–94
阿部定事件から「連続射殺魔」少年事件、深川の通り魔事件まで。法曹・精神医学・報道・警察その他必須の資料集。¥18000

中枢神経系 中世・近代篇
構造と機能 理論と学説の批判的歴史
スーリィ　ガレノス以後から19世紀末の脳局在説まで。比類なき医学・科学・哲学史の大古典、全2巻完結。萬年・新谷訳 ¥20000

東京文京本郷2丁目20-7　みすず書房
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税別）
www.msz.co.jp

フォード版ラテン語辞典をあちこち開きながら読む。また、JSTOR、Google Scholar、PubMed、CiNii でコペルニクスや同書に関する文献を探してリストをつくる。これらの作業を行う際、ウェブや文献データを管理する EndNote や Mendeley や ReadCube をはじめとする各種ツールを使ったり、Evernote でノートをつくったりする。

この作業のプロセス自体が思考や発見の過程であるので、なんでもかんでも自動化すればいいというものでもない。ただ学術アトラスでは、これらの作業をよりスムーズに、少ない手間で行えるように支援する仕組みを備えたい。読んで考えることに集中できるようにしたいからだ。

例えば学術アトラスで Bernard R. Goldstein, “Copernicus and the Origin of His Heliocentric System”, Journal for the History of Astronomy, Volume 33 issue 3, pp. 219-235, August 1, 2002. という文献が画面に表示されている。このとき著者名を選ぶと、氏の略歴と著作一覧が出る。それぞれの著作名は当該テキストにリンクされている。テキストが存在しない場合、所蔵する図書館の一覧、ネット書店や版元の当該ページへのリンクが添えられる。

また論文のタイトルに含まれる Copernicus や Heliocentric System といった語に対して同様の操作をすると、コペルニクスの略歴と著作一覧と関連文献一覧、「太陽中心系（地動説）」という概念の歴史的経緯に加えて、未解決の課題リスト、その経緯に登場する関連文献リスト、関連人物、関連概念が表示される。コペルニクスの著作一覧には、現存する手稿や原典各版デジタルデータへのリンクだけでなく各言語への翻訳版も含まれる。特定言語への翻訳や、カーソル位置の語彙について設定しておいた複数辞書の語釈も表示される。そうしたければ、同じ語について、過去から現在までの各種辞書の語釈の変遷も比較できる。

このようにして、さまざまな知識について、どのような研究や文献に裏付けられているのか、なにが未解決のままになっているのか、どのような論争があったのかといった情報が相互に参照できるようになっている。各学術文献内で用いられている語彙についても同様に参照できる。

また、利用者は自分が持っている任意の文書データを、この学術アトラスにインポート（データを追加）すれば、まずは自動的に当該文書データから、学術アトラスの既存のデータへのリンクが生成され、また各種辞書なども利用できるようになる。

例えば、中学・高校の教科書では、ある知識がどのような動機と過程でそこに書かれている状態に落着したかということは省かれている場合が多い。数学や物理学の「公式」はその典型である。結果だけが示されて、それを活用することに重点が置かれている。あるいは歴史の教科書で「ヘロドトスは歴史の父と呼ばれる」と記されているような場合、それがどのような史料に基づく記述なのかまで示されることは少ない。日本語や古文や英語の文法は、いつ誰が

考え出したのかということはほとんど書かれることがない。知識が学術やその歴史とリンクしていない状態にある。

学術アトラスは、個々の利用者が自分でカスタマイズもできる。データ同士のリンクを張ったり、自動生成されるデータを修正したり、ノートを書き込んだりといった、使い倒すための仕組みも備える[19]。また、そうしたいと思えば、ネットワークを通じて、全利用者や利用者グループに向けて、自分が行った追加や訂正を共有することもできる。

新たなる百学連環のほうへ

以上、まことにおおまかで恐縮だが、学術文献をさらに活用するための仕組みについてアイデアを書いてみた。要するに、学術文献の全体に対して相互のつながりや文脈を補完することで、学術全体の過去と現在をマッピングするという発想である。学術アトラスを利用することで、人は学術の全体と部分についての見当識を持ちやすくなる。また、マップのなかで自分が関心を向けている知の位置を知り、関連する知のありかを目に入れやすくなるという次第。

キーワードは「人間の身の丈」である。情報環境とそこに蓄積・流通するデータ量の爆発的な増加に伴って、学術文献へのアクセスも以前とは比較にならないほど容易になった[11]。他方で私たちは、そうした厖大な学術文献やデータを見晴らし活用しやすくなるような仕組みを必ずしも満足のゆくように構築できていないように思う。ことコンピュータは、これでも三〇年前に比べれば使いやすくなってはいるものの、人間が道具に合わせる状態が続いている。そろそろもう少し道具を人間に合わせる使い方を工夫してよいのではないか、このようなことを考えてみたのだった。

ここでは実装する際に持ち上がるはずのさまざまな問題については検討しなかった。見ようによっては無理難題に思えるかもしれない。だが、材料とそれをつくるための道具はすでに山ほどある。あとはアイデアを実装に移して実験するだけといったら楽観的に過ぎるだろうか。こういう場合、最初から完璧を目指すよりも、とりあえずつくって

新刊案内

伊藤セツ著
クラーラ・ツェトキーン
——ジェンダー平等と反戦の生涯
増補改訂版
《社会政策学会学術賞受賞》著者五五年間の研究の集大成。
菊判・二〇八四頁・本体一五〇〇〇円

『ローザ・ルクセンブルク選集』編集委員会編／保住敏彦・久間清俊・桂木健次・梅澤直樹・柴田周二・二階堂達郎訳
ローザ・ルクセンブルク経済論集 第四巻
経済学入門
本体八八〇〇円

岡澤憲一郎著
ウェーバーの宗教観
——宗教と経済エートス
『宗教社会学論集』をエートスの視座から読み解き、再構成する。
菊判・二五〇頁・本体五二〇〇円

藤原直樹著
『資本論』の経営理論
——協業論と指揮論の構築をめざして
『資本論』等に依拠しつつ経営学の基礎理論の構築を目指す
菊判・四七〇頁・本体八八〇〇円

御茶の水書房
〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://rr2.ochanomizushobo.co.jp/

みて考えるのでよいと思っている。とかいって、すでにどこかにあったりして。検索してみよう。

注

（1）この点については拙著『「百学連環」を読む』（三省堂、二〇一六）を参照されたい。同書では、西周が私塾で行った「百学連環」講義の記録を精読している。西は、幕末のオランダ留学を経て、明治期におけるヨーロッパ諸学術の日本への導入に貢献した人物。その講義でヨーロッパにおける学術全般のマップを提示しようと試みた。現代も使われている多くの学術用語を翻訳造語した学術書にとっての恩人の一人である。

（2）マーカス・デュ・ソートイ『知の果てへの旅』（新潮社、二〇一八）は、主に物理学についてこれまで人類が知り得てきたことの領域を案内しながら、その先にある未知、まだ答えが分かっていない場所に読者を連れていってくれる。学術の営みとその愉悦を教える好著。

（3）ただしそうした調査と整理・圧縮では、それを行った者による取捨選択が働いている。その妥当性を確認する場合、必要に応じて要約された元の資料を自分の目で確認することになる。

（4）ただし、どのような検索をできるか、検索結果を活用できるかどうかは、その人が脳裏に収めている知識次第である。

（5）情報の洪水状態は、いまに始まったことではないようだ。アン・ブレア『情報爆発 初期近代ヨーロッパの情報管理術』（住本規子＋廣田篤彦＋正岡和恵訳、中央公論新社）では、初期近代のヨーロッパにおいて、増え続ける情報に対して知識人たちがどのような工夫を凝らしたかという歴史が述べられている。

（6）検索に使うアルゴリズム次第で、検索範囲や量や質もおおいに左右される。検索エンジンがなにをしているかを理解しないまま使い続けるうち、いわゆるフィルターバブルの中に捉えられるということにもなりかねない。

（7）あるいは宇宙から原子核までを範囲として、「同じもの」が距離に応じてどう見えるかを映像にしてみせたイームズらの『Powers of Ten』のように。

（8）「学術」に対して、その他の人間の営みがあり、それらの中に学術を位置づけるという表現も考えられる。

（9）デカルト『哲学原理』（山田弘明＋吉田健太郎＋久保田進一＋岩佐宣明訳、ちくま学芸文庫）、ベーコン『学問の進歩』（服部英次郎訳、岩波文庫）、ディドロ＋ダランベール編『百科全書序論および代表項目』（桑原武夫編訳、岩波文庫）、André-Marie Ampère, *Essai sur la philosophie des sciences*, 1838（未邦訳）。

（10）重要なのは、現在の情報環境を利用者の理解や記憶に資する環境につくりかえることだ。そのためには現行のOSを、厖大なデータを人間が把握しながら使いこなせるようなインターフェイスに変えるとよいだろう。これについては「記憶のデザインのために――来たるべき知識環境の構想」（ウェブサイト「エクリ」掲載／http://ekrits.jp/2015/10/1779/）に記したことがある。

（11）現実には有料論文アーカイヴの是非や、どこまでオープンアクセスに向けてゆけるかといった課題も多々あるものの、総体的に見て学術文献へのアクセス可能性は向上していると思われる。

特集＊学術書を読む

大学の授業で専門書を読む——哲学の場合

景山洋平（東京大学講師）

初年次教育における古典的な哲学書への取り組み

高等教育における能動的な研究能力・学習態度の育成を目的として、今日、日本各地の大学で初年次教育が導入されている。筆者の勤務校である東京大学では、二〇一五年に、従来の文科一年生向けの導入授業の「基礎演習」を改組し、文科と理科の新入生全員を対象とする「初年次ゼミナール文科」と「初年次ゼミナール理科」が必修科目として設置された。それまでの基礎演習では、教員の専門と関係なく、語学のクラスによって機械的に受講者が割り当てられたのに対し、初年次ゼミナールでは、教員がみずからの専門にそくした初歩的な研究訓練の授業を設計して、学生は自分の興味にあわせて授業を選択できる。開講される学問領域は文科では哲学、文学、社会学、政治学、経済学、芸術学、歴史学、文化人類学などであり、おおむね諸学問をカバーする体制となっている。授業内容は各教員の裁量におおきく委ねられているが、文科共通の単位認定要件として学期末提出の小論文が定められており、これにより大学における研究活動へと導入することをめざす。

本稿で紹介する筆者の授業三コマは、初年次ゼミナール文科の哲学分野の開講科目である。三コマに共通の授業設計として、まず筆者がイントロダクションの講義をし（第三回）、グループワークで古典的な哲学書の講読発表をおこない（第四回〜七回）、あらためて筆者が哲学と社会や政治の具体的問題のつながりについて発展的な講義をし（第八回）、学生が立てたリサーチクエスチョンについて学生自身がグループで討議する反転授業をおこない（第九回）、学生全員がスライドやハンドアウトを用いて二十分ほど自分のテーマについて個人発表・質疑応答する（第十回〜十三回）、という流れになっている。一クラスは約二十人で

あり、講読発表等のグループは約五人で作られる。受講者の内訳は曜限によって異なるが、これまでの経験では、文科一類（法・政治）、文科二類（経済）、文科三類（人文学全般と社会学・教育学）の全ての学生が偏りなく筆者の初年次ゼミナールに受講希望を出している。第八希望まで履修希望を集計するなかで、筆者を含めてどの授業でも、受講者の約七割は第一希望の授業に当選する。言うまでもなく希望分野を履修できるか否かが学生のモチベーションを大きく左右する。

こうした新入生向けの授業だから、履修以前に専門的な哲学書を読んだことのある学生は多くない。そこで重要になるのが、必ずしも今後哲学を専攻するわけでない初学者が生産的なしかたで哲学の古典に取り組めるように、教員がお膳立てすることである。例えば、筆者の授業のひとつでは、「東西の哲学的対話から見る共生の問題」と題し、ハイデガーの「ドイツ的大学の自己主張」、九鬼周造の『いきの構造』、和辻哲郎の『倫理学』、アーレントの『全体主義の起源』を講読している。各テキストとも三十頁ほどの内容を筆者が指定して授業一回分の講読箇所とする。学生は、担当テキストを熟読した上で、スライドやハンドアウトを用いたグループ・プレゼンテーションで、テキストの論旨を要約し、内容を自分の言葉で説明し、自分なりの疑問点や問題意識を示さねばならない。もちろん大学に入学したばかりの学生が専門的な哲学書をただちに理解するのは困難なので、テキストの理解に役立てるべく筆者が作成した練習問題にも解答してもらっている。例えば、『全体主義の起源』では「権利を持つ権利」というアーレント哲学の根本概念をめぐる箇所を講読しているが、それについて次のような問題を課している。

「権利をもつ権利」の内実として挙げられる《行為と意見に基づいて他者から判断される関係性のうちで生きること》が人間にとってどのような意味で重要なのかを、自分の言葉で説明しなさい。

高度なテキストに取り組む際、初学者はそもそも何に注目して読むべきか分からなくなりがちだが、こうした問題文で「権利を持つ権利」という中心論点にフォーカシングさせることにより、初学者でも哲学的に重要な事柄に集中してテキストを分析的に読解するように誘導される。また、こうすることで、重要な哲学的トピックについて学生が互いの意見をたたかわせるための時間を授業中に確保できる。五十分間のプレゼンテーションの後にやはり五十分間ディスカッションをおこなうが、学生の議論が途切れることはほとんどない。

また、筆者の授業では、こうしたハードな哲学書を読ませながらも、ハイデガーや九鬼周造について課題論文を執筆することは学生に要求していない。筆者は、これらのテ

キストを、伝統的な哲学科における《ハイデガー研究》等の対象でなく（筆者自身は「ハイデガー研究者」だが）、人文学と社会科学が広く共有できる人間と世界をめぐる一般的問題に導入するための素材として考えている。例えば目下の授業では、イントロダクションの講義で「境界（border/Grenze）」を授業全体のキーワードとして挙げて、ジェンダーやナショナリティなど多様な場面で自己と他者が区別される事態が今日の哲学の主要問題であることにまず目を向けさせている。その上で、西洋と東洋の異なる歴史的文脈において共同性の問題にそれぞれ特徴的な仕方でとりくんだ二十世紀の古典として当該のテキストを学生に提示し、歴史上で実際にあらわれた様々な思考類型を学びつつ、学生自身が取り組むべき問題を見つけだすように求めている。これにより、もともと哲学科に進学希望の学生がハイデガーやレヴィナス、西田幾多郎などの哲学を論文のテーマとした他は、《近代日本におけるヨーロッパとの美術交流》や《ラテンアメリカ文学における他者への視線》、《地方の行政単位と地域アイデンティティの隔たり》、《日本の対台湾外交政策》など実に多様な主題を選択して、学生たちは課題論文を執筆してきた。

他の授業も簡単に紹介すると、社会科学系の学生が多い曜限では、「近現代の哲学的自由論とその倫理学的意義」と題して、カントの『実践理性批判』、ヘーゲルの『法の哲学』、ハイデガーの『存在と時間』、アーレントの『活動的生』を講読テキストとしている。また、文学部に進む学生が多そうな曜限では、「ハイデガー『存在と時間』を読む」と題して、ハイデガーの人間観が明確に表れる四つの節を講読している。後者の授業だけテキストを一冊にしているのは、伝統的な人文学研究のトレーニングに近いゼミも開講すべきだと考えたからである。

期待する授業効果について

人文学系の研究訓練を受けた読者は、ここまでの説明を読んで「そんなに速いスピードで短期間だけ読み進めても精読の訓練にならない」と疑問をいだいたことだろう。筆者自身が学んだ文学部の哲学科でも、一回の授業で『存在と時間』の原典を一段落だけ全員で味読し、一学期かけて一つの節を読み終わるという伝統的な研究訓練をおこなっていた。いうまでもなく、そうした授業の意義を否定するつもりはない。筆者の授業はあくまで教養教育とアクティブラーニングという特定の文脈に位置づけられるものであり、哲学の専門的な研究能力の育成を目ざすものではない。あえて言えば、大学教育、特に文系諸学問の教育をめぐる昨今のあまり明るくない社会情勢をふまえて、哲学科に限らずできるかぎり多く学生にとって有意義である仕方で哲学の古典と対話する可能性を探りたかったのだ。それでは、その意義とは何でありうるだろうか。

当然、もっとも一般的な意義は、伝統的なリベラルアー

ツの使命である。すなわち、人類の精神文化の広がりをしめす古典的著作に取り組むことは、学生が卒業後にグローバルないしローカルに活躍するための教養をはぐくみ、また、社会に出ればかならず直面する多様な人間観と世界観を柔軟にうけとめる広い視野をかたちづくる。これは、それ自体に目新しさはないが、大学教育において絶対に守りぬくべき理念である。例えば、カントやヘーゲルは近代世界の人間像を規定した代表的な哲学者であり、ハイデガーやアーレントはその近代の問題点が露呈した時代にあらためて人間のありかたを原理的に思考した哲学者である。また、和辻や九鬼などの京都学派の哲学は、西洋という他者に直面した日本人が、西洋哲学の知を吸収しつつ、自らの歴史状況を原理的に考察した稀有な記録である。無論、これらの古典は簡単に読みとけるものではないが、そうした著作だからこそ、大学のカリキュラム体系の広がりにおいて、研究者である教員や同世代の他の学生とともにじっくり取り組む意義がある。無論、これは「ゼミではとりあえず本を読ませておけばよい」という怠惰の言い訳になってはならず、教員が古典のメッセージを学生にとって有意義なしかたで身につけさせられるように工夫することが前提となるが。

第二に、筆者の授業に限定された目標は、古代ギリシア以来あらゆる学問的主題と関係してきた「哲学」の特異性を生かして、文学から政治までかぎりなく多様な関心をもつ学生が共有できる研究訓練の場を作ることである。換言すると、古典的な学術書、特に哲学書がもつ原理的な人間観と世界観をめぐって様々なディシプリンの学生が共同で作業しつつ、そうして形づくられた場において、学生たちが狭義の哲学にかぎられない各々異なる問題意識と主張をぶつけあうように授業設計している。こうすることで、基礎的な研究訓練を行いながら、自分とはまったく異なるパースペクティブをもった生身の他者と議論を戦わせてもらうのである。学生は入学後しばらくすると各人の専門課程に分かれていくが、それ以前の教養教育において、それぞれの大きく異なる問題意識について他の同年代の学生と議論し、理解できないことを質問したり、納得できない点を批判したりすることは、各人のディシプリンに閉じこもらずに、学問と世界に対して幅ひろい視野を持つために絶対に必要だと筆者は考える。もちろん、まったく枠組なしに自由に研究させるとクラスのまとまりが失われてしまうだろう。だが、共通の哲学書を資料読解訓練の対象とすることで、学生たちはグループワークの作業体験を共有し、さらにお互いの問題関心を結びつける基本的な人間観・世界観について想像力をもつことができる。食事に喩えていうと、哲学書という巨大な「器」を学生に彩り豊かに盛りつけてもらい、彼ら自身の多様性によって人間と世界の広がりを学んでほしいのだ。

学生の反応と変化――授業内・一年次・それ以降

それでは、大学の授業で専門的な哲学書を読むことで、以上の目標を実際に達成できただろうか。学内向けの授業評価などのデータをここに記すことに問題を感じるので、客観的指標を念頭に置きながら、重要な四点について筆者の主観的観測を記させていただきたい。

第一は、授業実施中の学生の反応である。これについて強く印象に残ったのは、学生によってそれぞれの哲学書への向き不向きが大きく変わることである。つまり、ハイデガーの文章がすんなり頭に入っても、カントには全く馴染めないというように、古典との相性がはっきり分かれるのだ。授業運営上、このことは無視できない。例えば、上述の筆者の二つの授業のようにカントやハイデガーなど数種類の古典を分散して読む場合、学生は自分に向いた哲学書を見つけやすくなり、授業について来れない者が出にくくなるメリットある一方で、一冊の哲学書に沈潜して考察を深める研究者タイプの少数の学生が能力を伸ばしづらくなるデメリットもある。反対に、『存在と時間』一冊に絞って読むような伝統的な人文学の授業では、ハイデガーに向いている一握りの学生が熱狂的に努力して大きく成長する一方で、それ以外の学生がついて来れずモチベーションが低下してしまうことが残念ながらあった。専門課程に先だつ教養教育としては前者のテキスト分散型のほうが望ましいかもしれないが、将来の研究者の卵に能力を開花させる場を早くから与えるには伝統的な《一冊をじっくり読む》スタイルも捨てがたい。二つのスタイルをどのように使い分けて、どう改善するか、まだまだ検討しなければならない。

第二は、授業期間における学生の変化である。上述のとおり、初年次ゼミナールは入学したばかりの新入生を対象とする。アカデミックな活動にまったく馴染みのない学生がほぼ全員という状態から授業が始まるのだ。そうすると、筆者が一定のお膳立てをするといっても、ただでさえ難解

藤原書店

東京に「いのちの森」を！
宮脇 昭「ふるさとの森を、ふるさとの木で」を、国民運動に！千年先に残る本物の緑の都市づくりのため、渾身の提言。1600円

昭和12年とは何か
宮脇淳子・倉山 満・藤岡信勝
第二次大戦目前、日中戦争が始まった運命の年を、専門を超えて世界史から問い直す。2200円

義のアウトサイダー
新保祐司　明治以降の近代化に便乗せず、神・歴史・自然に正対した人物、「美」「利」でなく「義」を生きた人物の系譜。3200円

フロムと神秘主義
清 眞人　思索の最深部にある神秘主義論、宗教論に初めて着目し、全体像を描く。30年間の探究から生まれた決定版。5500円

〈画文集〉第70代 横綱日馬富士 相撲道
文＝日馬富士公平　文・画＝橋本委久子　監修・草山清和 相撲道、社会活動に邁進した横綱の真実。
カラー画 約120枚　3500円

雑誌 兜太 Tota vol.1
〈特集〉一九一九 私が俳句
現役大往生した俳人金子兜太の思想を探る雑誌！〈年2回刊 春秋〉
〈編集主幹〉黒田杏子〈編集長〉筑紫磐井〈名誉顧問〉金子兜太
〈編集顧問〉ドナルド・キーン／瀬戸内寂聴／芳賀徹／藤原作弥
金子兜太インタビュー／佐佐木幸綱／夏井いつきほか　カラー口絵付 本文カット＝池内紀 1200円

月刊 機　B6変32頁 10月号 No.319
加古里子／髙村薫／舘野泉／佐々木愛／神野紗希／石瀧豊美／木村汎／海勢頭豊／加藤晴久／中西進／中村桂子／槇佐知子ほか
年間購読料2000円(送料込)　◎見本誌・ブックガイド呈　＊表示価格税抜
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013　TEL 03-5272-0301
ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

で知られる古典的な哲学書が学生にとって《これまでの人生でもっとも難しい本》となることに変わりはない。これには、学生への要求度が非常に高くなるデメリットがもちろんある。だが、初めからハードな専門書に取り組ませることには、研究活動に向けた意識改革をうながすメリットがある。それは「他人に咀嚼してもらった加工済みの素材でなく、自分の力で一次資料という生の素材に取り組まなければならない」という意識の涵養である。大学に入ったばかりの学生は、研究対象に直接に向かい合って学問的知見を構築した経験がないので、ともすれば一般向けの解説書に依存して、自らのリサーチクエスチョンを立ててしまいがちである。無論、それでは学問的な研究態度でない。これに対して、プロの研究者が実際に取り組んでいる哲学書を苦労して読み解くなかで、筆者の授業の学生たちは、必ずしも哲学書でないが、美術館に資料収集に行ったり、台湾関連の行政文書や新聞記事を大量に集めたり、一九世紀のドイツの言語思想の資料を各地の図書館から取り寄せたりと、自分で汗を流して一次資料に向かい合うエートスを持ってくれている。

第三は、一年次全体をつうじた変化である。哲学に興味のある学生は夏学期の初年次ゼミナールが終わった後もしばしば筆者との交流をつづけてくれるので、専門書を読んだ経験が一年次の学生の成長にどのように影響するかを知る手がかりとなる。これについて特記すべきは、ちょうど述べた《一次資料に向かい合う態度》が、大学の内外での学生の積極的活動の（少なくとも一つの）原動力となることである。例えば、哲学科に進学予定のある学生は初年次ゼミナールでハイデガーの『ドイツ的大学の自己主張』の詳細な解釈を試みたが、彼によると、そこで得た哲学的洞察を他の学問分野の素材にそくしてより具体的に検討したいと思って文化人類学のゼミに参加して、民族誌の資料に挑戦したとのことである。また、昨年の初年次ゼミナールでは哲学研究を志す学生がたまたま多数集まったが、彼らは友人となって、全国の高校生と哲学対話の合宿をする学生団体を立ち上げた。

第四は、二年次以降の専門決定および将来的な進路との関係である。これは二年次中頃まで専修課程が決まらない東大の制度と密接にかかわる点だが、一般論としても意義があると思う。研究する態度で専門的な哲学書に取り組むことで、なによりまず「哲学を研究するとはどういう生活をすることか」を学生に体験してもらえる。これにより、哲学に関心ある学生でも「向いていないから別の専修課程にしよう」と考え直したり、「面白いから思想系の学科に進もう」と意を強くするという風に、二年次以降の学習にむけた判断材料を与えられる。実際、どちらの学生もいる。さらに、一次資料との格闘に喜びを感じられる学生は、大学院に進学して本格的な研究に従事することを検討するようになる。これもやはり判断材料としての効果である。

特集＊学術書を読む

無限に触れる

三浦衛（春風社）

とじぇねわらし

一九九九年一〇月の創業以来、今年九月で二十周年になる。以前勤めていた出版社が倒産し、さてどうしたものかと途方に暮れたが、酒の勢いも借り、仲間二人と学術書の出版社を立ち上げ、約八〇〇点の人文書を刊行し現在に至っている。

昨年「学術書を読む『専門』を超えた知を育む」というトークイベントに招かれ、登壇した際、学術書を読むことの事始めは、自分の「とじぇねさ」であったことに触れた。「とじぇね」は、わたしの故郷・秋田の方言でさびしいことを表す。徒然草の徒然、とぜんから来ているのだろう。

わたしは、とじぇねわらしでありました。無くて七癖というけれど、生まれついての癖のように、とじぇねさがべったり貼りついて剥がそうにも剥がれない。無理に剥がそうとすれば、血が噴き出ていたかもしれない。子どもが自分のことをそんな風に分析できたわけではない。いま振り返れば、そんな子どもであったかと思うのだ。小学校に入学し、とじぇねさは消えてなくなりはしなかったけれど、授業で先生の話を聞いていると、国語であれ、算数であれ、理科であれ、何の教科にかかわらず、ひとりになって静かに思い返せば、とじぇねさが薄まっていることに気が付いた。収穫を予祝するさなぶりや、手づくりのたなばた祭のようなものだったろうか。授業は、わたしにとって勉強というにはほど遠く、とじぇねさを紛らしてくれる、おとぎの部屋のような、とろけるおはなしの時間だった。

トークイベントに参加されたある方は「わたしは常に寂しく苦しい。何も持っていないし、これからも何もない。もう全て終わってくれといつも望んでいる。それでも本という大船に縋って明日も生きていくのだろう」というコメ

ントを自身のブログに書いてくださった。どこのどなたとも存じ上げないけれど、こういうつながりもあるのかとうれしく、ありがたかった。

学術書を読むことの事始め二つ目は、違和感である。小学校で習う理科の人間の体についての授業（今はどうなっているのだろうか）で、頭がいわば司令塔の役割を持ち、体の各部位がその指示に従う、みたいな説明を先生からうかがった。しかし、手のひらを開いたり、両手を合わせたり、自分のちっぽけな心を思うと、そんな説明では納得できなかった。また、それから十年。大学に入って二年目の年だったかと思う。わたしは夏休みで帰省していた。町工場で働いている母が帰宅すると、いつになくうきうきしているように見えた。聞けば、いつか会社を辞めるとき退職金が九十万円もらえることが告げられたのだという。大企業ではすでに一千万円級の退職金が取りざたされていた頃だと思う。喜んでいる母の姿が目に焼き付いた。眠い眼（まなこ）を無理やりこじ開けて読んでいた『資本論』が俄（にわ）かに切実さを増した。ことほど左様に、とじぇねさと違和感が、大げさかもしれないが、わたしの人生のテーマだった気がする。

学術書を読む、さらに学術書を編集し出版するということは、わたしにとって、子どものころに抱いたぼんやりしたテーマを追い求めることであり、学問という人間が作り出す大いなる物語に加えてもらうことでもあった。そのなかで、少しずつでもとじぇねさを薄め、違和感をなくしたいと願ってきた。

千年の時を超え

ところで、そもそも学問とはなんなのか。先だって吉川幸次郎（一九〇四～八〇）の『「論語」の話』（ちくま学芸文庫）をおもしろく読んだ。この本は、一九六六年八月にNHKラジオで放送されたものがベースになっている。これを読むと、吉川が学問を、学問することをどう考えていたかが分かる。第二二回「最晩年の孔子と孔子伝説」には「人間は生きるためには必ず学問をしなければならない、書物を読まなければならないという態度、これは孔子の教えの中で私が最も尊重するものでありますが……」とある。また、第二七回「終わりに――学問のすすめ」には「孔子が学問として意識いたしますものは過去の人間の経験であります。それを記載した書物をよく読むということが、孔子の学であります」と。話し言葉ということもあるが、分かりやすく味わい深い内容であった。宮城教育大学に勤めていた昭和の著名な教育実践家・斎藤喜博（一九一一～八一年）の最終講義のときに語ったという教育哲学者・林竹二（一九〇六～八五）のコメントを重ねて思い出したりもした。林いわく、「先人たちに少しでも近づきたいというのが私の学問です」。わたしもそのようでありたい。

『論語』の「子罕第九」に「吾未見好徳如好色也」がある。子曰わく、吾れ未まだ徳を好むこと、色を好むが如くする

者を見ざる也。色をどう解釈するかはいくつか説が分かれるようだが、吉川によれば、美人のことであると。「美人を愛するほどの熱烈さで、道徳を愛する人間に、私はまだ出あったことがない」。洋の東西を問わず多くの芸術作品を見るにつけ、また卑近な例では、テレビのニュースを賑わす事件を見るにつけても、千年二千年ぐらいでは人間の根本、本質はあまり変わらないということかもしれない。

また、吉川によれば、現実の世の中に失望した孔子は、将来の人類のために役立とうとして古典文化を整理し五つないし六つの古典を後世の人のために編み定めて残した。そのことは『史記』の「孔子世家」に入っていると。孔子が生きたのは中国、春秋時代で、現代との時間のへだたりは優に二千年を超えている。ところが、吉川の『論語』に関する文を読んでいると、『論語』のことばがはるか昔のものでなく、敬愛する友といまここで語り合っているような錯覚にとらわれる。上から降りてくるのでなく、いつも横にあって慕わしいことば。そう感じられるのは、吉川にとって、千年の時間がけっして現実離れしたものではないということなのだろう。

吉川には『論語』のほかに、ライフワークとしての杜甫詩の訳業があったが、生前、刊行成った書籍を手に取ることができたのは第三巻までであった。その後、同好の研究者、教え子たちが仕事を引き継ぎ、版元を変え、第一〇巻までが刊行されている。吉川が構想した全二〇巻のうちやっと半分終わったことになるが、一つのテーマを探究するには人生はあまりに短い。

千年の時間ということから、もうひとり忘れられない人物に先にあげた林竹二がいる。林の『若く美しくなったソクラテス』（田畑書店、一九八三年）に、「知識による救い」という論考がある。そこで林は、知識によって人間は救われるのかと問いを発している。人間は、外にあるものを習得し自分の生きる力にすることができる、それが他の動物とは決定的にちがうと林は言う。たとえばビーバーは枯枝などを利用してとても精密なダムをつくるが、それは生得

新曜社

木村忠正 著
ハイブリッド・エスノグラフィー
NC研究の質的方法と実践
定性・定量の両面から、ニュースサイトのビッグデータ、オンライン交流のログなどの〈現代〉を分析した民族誌の革新。A5判並製336頁・3200円

質的心理学辞典
能智 正博（編集代表）
香川 秀太・川島 大輔・サトウタツヤ・柴山 真琴・鈴木 聡志・藤江 康彦（編）
質的探究の「いま」を概観し理解するための厳選された項目を、多様な学問的背景をもつ第一線の252名が解説。A5判並製432頁・4800円

東京神田神保町3-9〈税別〉
電話 03-3264-4973
FAX 03-3239-2958
http://www.shin-yo-sha.co.jp/

の技であり、習得した技術ではない、人間は外にある価値を習得して今日や明日を生きる力にできるのだ……。そういう力を育み発揮するまでの時間を考えるとき、百年二百年では不足かもしれない。生得でなく習得するということに、吉川の学問がひびき合う。

根について

千年の時間によって培われ、育つものとは何か。

秋田魁新報の主筆をつとめ、のちに衆議院議員に選出された人物に中村千代松（一八六七～一九四一）がいるが、かれはまた、新井奥邃（一八四六～一九二二　森有礼の知遇を得、キリスト教を深く学ぶため、森に伴われ一八七一年にアメリカへ渡りトマス・レイク・ハリスのコミュニティに入団、そこで生活しながら特色のあるキリスト教を学び一八九九年に帰国した。春風社の創業はそれからちょうど百年後）の人格に触れ、ふかく感化され、奥邃の最期を看取るほど奥邃に親近した人でもあった。中村いわく「言行に『根』あるといふことはつまり其の人物に『根』あるからである」。わたしが奥邃を知ったのは、林竹二の『田中正造の生涯』（講談社現代新書、一九七六年）によってであったが、林は若いころ、角田桂嶽（一八九〇～一九四四）によってキリスト教を知り、神学をこころざした。のちにアリストテレスを経て、ソクラテス、プラトンを研究するようになるが、林の学問の根は、角田によって培われたものではなかったか。墓碑銘は無根樹。根によらぬ魂の不死はあり得るか。根を育むことによってしか人間は生きられないのではないか。プラトンがいうように天の穴はあるのか。林もまた正造にならい天国への道普請を生きたか。問いは終わらない。

無限に触れる

学術書の編集者、出版社は、人間が作り出す学問をまとめ学術書にするのを手伝わせてもらいながら、なまなましい世界に触れ、目に見えない大いなる根に触れていく。学問は、人から人へ渡り、積み重ねられていく壮大な物語だ。そこに無限の扉が佇立する。学問は、人間の英知を表すものではあるけれど、学問によっても触れえない、何かそこに存在の基底をなす見えない扉がありはしないか。わたしが学んだ小学校の理科教室には「真理探究」の横書きの揮毫が黒々と掲げられていた。その真理とは学問上の真理を指していたのかもしれないが、学問を超える真理の真理が、千年の時を超え、学問を包含する世界をさらに支えているのかもしれない。無限への真理の扉は開くときがあるか。生命の機は一息に在り、とは奥邃のことばである。一息開けて億兆相抱くべし。一息閉ぢて衆星隕越を致さん。

最後に『論語』子罕第九より。「子在川上曰、逝者如斯夫、不舎晝夜、」吉川の読みに従えば「子、川の上に在りて曰わく、逝く者は斯くの如き夫、昼夜を舎てず」。これも無限に触れることばにちがいない。

大学出版部ニュース

表示価格は税別です。

事務局／一一月の業務

一日　「大学出版・新刊速報発送リスト」の修正&アップロードを行う。大学の生協、日本出版クラブなど22件。

二日　冊子『大学出版部協会の歩み　二〇一三－二〇一八年』の序言原稿を印刷所に入れる。協会の年末例会出欠の返信が続いており、リストにまとめる。

五日　第4回理事会議事録案の作成。事務局のコピー機と、ビルの消防設備点検があるも特に異常なし。

八日　「発送リスト」の修正、沖縄県立図書館など5件、送付中止は2件。

一二日　『協会の歩み』の本文校正が進む、表紙修正案を関係先に配布。DM返品2件、新刊速報の宛名修正1件。

一四日　一般読者より全集の別巻本に関する問合せあり、該当出版会に連絡。

一五日　水産系研究所より「脅威となる日本の外来魚」に関する本の問合せが入り処理する。懇親会リストの修正。

一六日　印刷所より本文3校が届く、合わせて表紙の再修正を戻す。

一九日　協会五五周年記念ブックフェア用に『大学出版』のバックナンバーをとり揃えて梱包し、発送にそなえる。

二〇日　理事会議事録案の内容について発言者にメールで問い合わせる。編集部会秋季研修会の経費清算の打ち合わせ。夕方、国際文化会館で宴会担当者と年末例会について打ち合わせる。ここはいま定例になっており、細部までよく対応してくれて問題ないが、オートマチック化された仕事は楽な反面、落とし穴があるので気をつけなくてはとこの頃よく思う。

二一日　『大学出版』分担金・広告料、ウェブサイト分担金、新刊速報三九〇号投げ込み料等の請求書発送。

二二日　リスト修正、大学図書館など7件。引き続き分担金関係の請求書発送。

二六日　『協会の歩み』末尾に使うブックレットの広告版下データを回してもらい、印刷所に入稿。例会出席者の名札を確認、領収書を作成する。

二七日　『協会の歩み』表紙、本文とも校了。

二八日　毎年弘前大学出版会から献送して頂いているカレンダーを年末例会の会場に直送手続きをとる。夕方、朝日新聞社の「出版懇親の夕べ」に出席。宴会場が広く盛況で、隣同士肩がふれあうほどであったのに、急に周りが静かになり、一人だけ立ち尽くすような一瞬があったのは、あれは何だったのかと思う。

北海道大学出版会

▼帰山雅秀著『**サケ学への誘い**』（A5判・二一四頁・二四〇〇円）著者の半世紀に及ぶサケの研究について生態学を中心にまとめました。魚類学を学ぶ学生や研究者の卵をはじめ、ナチュラリスト・釣り人などサケに関心のある人たちのための「サケ学」の入門書。二〇一九年の国際サケ年にむけサケの魅力と不思議さを堪能ください。

▼江口和洋・高木昌興編著『**鳥類の生活史と環境適応**』（A5判・二八八頁・三二〇〇円）鳥類研究の基盤となる生活史戦略につき、産卵・繁殖様式、営巣戦略・採餌戦略から鳥の渡りや外来種の定着など包括的に論じた論文集。

▼砂田徹著『**共和政ローマの内乱とイタリア統合―退役兵植民への地方都市の対応**』（A5判・二七四頁・六五〇〇円）前八〇年代のローマの内乱の後、イタリア各地の都市に退役兵植民が実施され、それら都市は存続の危機に直面した。本書は、特に地方貴族のローマとの交渉を分析し、帝政ローマへ至るまでのイタリアのあり方、イタリアに政治的一体化がもたらされた道のりを明らかにする。

弘前大学出版会

▼Radiation Environment and Medicine 編集委員会編『**Radiation Environment and Medicine Vol.7 No.2**』（A4変形判・六〇頁・一一〇〇円）被ばく医療に関わる最新の知見を網羅した総説や原著論文を中心に放射線科学の幅広い分野にわたる論文を掲載した英文学術誌。今号では、放射線計測、放射線治療等の論文五報、海外研究者の特別寄稿論文二報、国際会議報告等を掲載。

▼深作拓郎・増田貴人・古川照美・生島美和・飯野祐樹著『**弘大ブックレット No.13　社会とかかわって学ぶ―大学生が取り組んだ世代性と市民性のサービス・ラーニング実践**』（A5判・八八頁・一〇〇〇円）。弘前大学出版会からの「知」の発信や社会に向けた「問題提起」を目指す「弘大ブックレット」シリーズ最新刊。学びの可能性の発見！「市民性」を体験的に学ぶサービス・ラーニングという教育方法を用いて、育児体験を通じて大学生たちの地域および家族についての意識を高める実践を紹介。大学と地域の連携、若者の地域参加を考えるためのヒントに満ちたブックレット。

東北大学出版会

▼東北大学高度教養教育・学生支援機構編『**高等教育ライブラリ13　数理科学教育の現代的展開**』（A5判・二一六頁・二一〇〇円）あらゆる学問において活用され、複雑化した社会を生きる現代人の教養としても不可欠になっている「数理科学」の素養を再評価する。

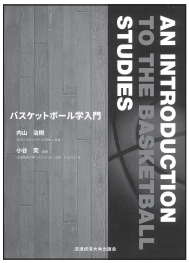
▼東北大学高度教養教育・学生支援機構編『**高等教育ライブラリ14　個別大学の入試改革**』（A5判・三〇六頁・三二〇〇円）高大接続改革が進む中、個別大学には「大学入学共通テストの活用」と「多面的・総合的評価への転換」が突きつけられている。それらの問題点と解決の糸口を多様な視点から探る。

▼東北大学東北アジア研究センター編『**東北アジア学術読本7　東北アジアの自然と文化**』（四六判・一九二頁・二五〇〇円）東北大学東北アジア研究センターの20周年を記念し、同センター発行の「ニューズレター」「うしとら」から選りすぐりの学術エッセーを再録。「Ⅰ．自然」、「Ⅱ．人文」、「Ⅲ．学際」の3部構成で、東北アジアの未来に発信する多領域の専門の知、最新の知を語る。

流通経済大学出版会

▼中谷秀樹編著・清水久仁子共著『**観光と情報システム［改訂版］**』（A5判・二六四頁・一八〇〇円）観光とは環境の異なる人との交流や社会での体験で創造される様々な恵みを享受すること。本書は観光産業を目指す学生、ビジネスマン必読の書である。

▼内山治樹・小谷究編著『**バスケットボール学入門**』（A5判・二四八頁・一五〇〇円）本書はバスケットボールの分析・究明を通して専門性をより一層高めたいと願う人のために、導入ないし道標の役割を担う入門書である。



聖徳大学出版会

▼川並知子著『**おりがみでおはなしづくり**』（B5判・七〇頁・一五〇〇円）誰もが知っている物語二篇と著者自作のおはなし三編を取り上げて、そこに登場してくる人物や動物、お花などの折り方をたくさん紹介しています。さらに、それらの組み合わせを展開させることで、自分だけのオリジナルな作品やおはなしがつくれるよう誘われています。さぁ、脳と手をフル回転させて、自分だけのおりがみの世界を創造してください。

〈目次〉
◆白雪姫
◆ももたろう①
◆桃太郎②
◆どうぶつこどもえん
◆やぎさんのおはなし
◆吾輩はねこである

慶應義塾大学出版会

▼シリーズ**「世界を読み解く一冊の本」**（第一期、全一〇巻）名著を読むための入門書シリーズ。初回配本は、安田敏朗『**大槻文彦『言海』**』（四六判、二〇八頁、二〇〇〇円）。

時に、聖典として崇められ、時に、焚書や発禁をうけた書物の運命は、つねに私たち人間とともにありました。

私たちにとって、本とはいったい何なのでしょうか？　今後、本はどのような運命を辿っていくのでしょうか？

本シリーズは、その問いを、何十年、何百年と読みつがれている世界の名著――とりわけ本について問題提起をする本――をひもとくことによって明らかにしたいと考えています。

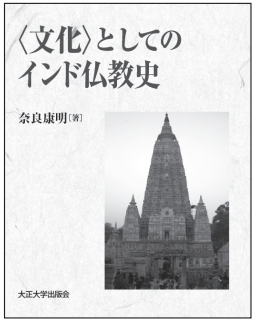
専修大学出版局

▼西部忠編著『**地域通貨によるコミュニティ・ドック**』（A5判・三二〇頁・二八〇〇円）コミュニティ・ドックとは、研究者とコミュニティの協働を通じ、コミュニティ自らが自己診断を行い、自己変革を実践していく社会実験プログラムである。事例として苫前町地域通貨券、韮崎市・北社市地域通貨「アクア」、更別村公益通貨「サラリ」、ブラジル「パルマス」を扱う。

▼新福悦郎著『**いじめ問題関係判決書の教材開発といじめ授業―構成要素を中心に**』（A5判・四七六頁・四四〇〇円）いじめをどう教えればよいのか――著者は、法と人権の視点からいじめ裁判判決書教材を開発・活用し、二〇年近くに亘り授業実践を重ねてきた。本書ではそのいじめ授業の成果が、構成要素の抽出という形で示され、その要素は本書の教育実践学上の意義を明らかにするものである。

大正大学出版会

▼奈良康明著『**〈文化〉としてのインド仏教史**』（A5判・二三二頁・二五〇〇円）本書は、大正大学綜合仏教研究所の特別講座「インド仏教文化史論」を基に著者自身が加筆した書である。インド思想・文化から仏教まで広範囲かつ多岐にわたり研究した著者の仏教文化史をテーマとした集大成。



▼大正大学地域構想研究所編『**地域人**』（A4判・平均一四四頁・一〇〇〇円・毎月十日発売）第三九号　特集―つながる京都／Part1日本各地とつながる食文化［だし］［和菓子］／Part2世界とつながる伝統工芸［平箔×台湾］［竹垣・石灯籠×アメリカ・イタリア］／Part3消費者とつながる職人技［朝日焼］［木版画］［京提灯］他

玉川大学出版部

▼三輪えり花著『**シェイクスピアの演技術**』（AB判・三七六頁・三八〇〇円）日本語で実際にシェイクスピアを上演するための、演技・演出解説書。具体的な戯曲場面を抜粋したエクササイズで、現代の感性を十六世紀の作品に適用する方法を示す。スタニスラフスキィ・メソッドや当時の演劇状況、原文などにも触れる。

▼**〈保育・幼児教育シリーズ　改訂第2版〉**宮﨑豊・田澤里喜編著『**健康の指導法**』、若月芳浩・岩田恵子編著『**人間関係の指導法**』、若月芳浩編著『**環境の指導法**』、大豆生田啓友・佐藤浩代編著『**言葉の指導法**』、田澤里喜編著『**表現の指導法**』（B5判・各約二〇八頁・各二四〇〇円）二〇一八年施行の新しい幼稚園教育要領等に対応する。自学自習できる構成で、現代の諸課題に応じた事例も多く収録する。

▼目代邦康編／小林準治絵『**〈玉川百科こども博物誌〉空と海と大地**』（A4判・一六〇頁・四八〇〇円）風がふいたり雲ができたりするしくみ、川の流れかた、地球のかたちや内部のようす――。地球で起こるさまざまな現象を、惑星運行儀などの道具をつかって観察する。

中央大学出版部

▼田中茂次著『**会計の意味論**』（中央大学学術図書95）（A5判・二六〇頁・二六〇〇円）会計基準のグローバル化に伴い、新しい会計基礎理論の樹立が差し迫った課題となっている。企業の複式簿記や財務諸表の計算構造について、共有すべき構造観があるとすればそれはどのようなものであるかを明らかにするために書かれた本書は、変動貸借対照表と原型損益計算書という概念を基礎におき、そこから種々の財務諸表が生成される過程を考察する。

▼菅原彬州著『**岩倉使節団と銀行破産事件**』（中央大学学術図書96）（A5判・三一〇頁・三一〇〇円）明治五年秋、ロンドンの銀行破産で多額の預金を失った岩倉使節団と欧米の日本人たち。岩倉・木戸・大久保らの団員たちや留学生は急場を拝借金で凌いだが、返済処理はどのように行われたのか。長州人南貞助の甘言に乗せられ預けた公私の預金額・損失額はどのくらいか。また破産した銀行はどんな営業をしていた銀行だったのかなど、太政類典や関係者の回想録の史料より、被害の実態を究明した研究書。

東京大学出版会

▼新井紀子・東中竜一郎編『**人工知能プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」—第三次AIブームの到達点と限界**』（A5判・二九六頁・二八〇〇円）五年間の東大挑戦からわかったAI研究の現状と限界。AI研究の現在を一望する。

▼桐野高明著『**医師の不足と過剰—医療格差を医師の数から考える**』（四六判・二三二頁・二九〇〇円）戦後の医師養成の歴史をふまえ、他の職種と比較しつつ医師の数の問題に実証的に迫る。医療崩壊が叫ばれる昨今、医の未来を展望する。

▼吉原直樹著『**都市社会学—歴史・思想・コミュニティ**』（四六判・三三六頁・三二〇〇円）隣接する諸科学と共有する知の枠組みを積極的に開示し、現代都市のフロンティアを具体的・経験的にとらえながら、その全体像を示す。

▼杉本史子著『**近世政治空間論—裁き・公・「日本」**』（A5判・四〇〇頁・七〇〇〇円）政治空間としての江戸城、そのなかでの裁判とは何かを問い直すとともに、メディアのあり方、さらには幕末の新しい政体構想の模索を描く。空間論的アプローチによる新たな政治史叙述の試み。

東京電機大学出版局

▼横幹〈知の統合〉シリーズ編集委員会『**横幹〈知の統合〉シリーズ　ともに生きる地域コミュニティ—超スマート社会を目指して**』（A5判・一四四頁・一八〇〇円）日本政府は、わが国の目指すべき社会の姿として「Society 5.0（超スマート社会）」の実現というテーマを打ち出した。実現のためには、科学技術と社会の相互関係と人類の未来について、しっかりと見据える必要がある。しかしながら、人びとの関係性としてのコミュニティのあり方に関する事柄が十分に議論されているとは言えない。今、「人びとが共に生きる社会（共同体：Community）」の側から、「科学技術」を考えるべき時期に来ているのである。本書は以上のような問題意識のもとに、文理を横断する多様な視座から、人間を中心とした望ましい未来社会の基盤を検討するものである。

法政大学出版局

▼G・ベンスーサン著／渡名喜庸哲・藤岡俊博訳『**メシア的時間―歴史の時間と生きられた時間**』（四六判・三三〇頁・三七〇〇円）ユダヤ的伝統の記憶と、近代の世俗化した歴史哲学との出会いから生まれた〈メシア的なもの〉の本質に迫る。

▼L・ボルタンスキー著／小田切祐詞訳『**胎児の条件―生むことと中絶の社会学**』（四六判・五八六頁・六〇〇〇円）当事者へのインタビューおよび社会学を初めとする様々な知とともに、人間存在の社会への参入を司る象徴的な制約を分析する。胎児の条件とは人間の条件である。

▼J・G・ヘルダー著／吉田達訳『**神第一版・第二版―スピノザをめぐる対話**』（四六判・四六八頁・四四〇〇円）数多の知識人が身を投じた「汎神論論争」。その舞台を用意した最重要書、増補改訂された第二版とともに初の完全訳！

▼I・パペ著／脇浜義明訳『**イスラエルに関する十の神話**』（四六判・三〇八頁・三四〇〇円）歴史の歪曲によって生み出されてきた「神話」、すなわちイスラエルを正当化するプロパガンダの背景を読み解き、反証をあげて論駁する。

武蔵野大学出版会

▼阿部和穂著『**大麻大全**』（A5判・四〇八頁・三〇〇〇円）「大麻は本当にダメなものなのか？」「本当はいいものなのか？」大麻の歴史から、メリット&デメリット、諸外国の現状など、薬学部の教授がそのすべてを解説します。

▼佐藤佳弘著『**「パワーアップ版」わかる！伝わる！プレゼン力**』（A5判・一八四頁・一八〇〇円）プレゼンテーションにはコツがあり、それがわかれば誰にでもできるようになります。大学でプレゼンの授業を担当していた著者が、すぐに活用できるテクニックを解説します。

武蔵野美術大学出版局

▼【近刊】向井周太郎著『**形象の記憶／デザインのいのち**』（A5判変型・二七二頁・予価二八〇〇円）一九八六年『かたちのセミオシス』として発表した「太陽残像」以下の論考に新たに図版を加え、近年の「原像の崩壊」「かたちの誕生 身振りといのち」を再掲載し、書き下ろし「生知としてのデザイン あいだに」を加えた本書は、本学大学院基礎デザイン学コースの教科書として編まれた。デザインの根源を求めて、かたちが生成する瞬間を自然界に見出した著者がゲーテの形態学を主軸に、生物学、哲学、経済学の領域にまで踏み込んで生活世界におけるデザインを追究する。芸術性と科学性といった対立項を共存させる概念として「あいだ」「くもり」を取りあげ、新たなエチカの形成を提唱する。

▼【近刊】古賀徹編『**デザインに哲学は必要か**』（A5判・二八八頁・予価二二〇〇円）二〇一八年夏に開催されたデザインの基礎論に関する連続シンポジウムを九名の著者により再現。理念的な問題のみならず、現実的な「デザインを教えることはできるのか」までを論ずる。

明星大学出版部

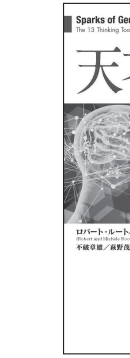
▼明星大学保健体育部会編『**子どもの体育指導のエッセンス**』（A5・一八〇頁・一八〇〇円）子どもたち一人ひとりに対して、より充実した体育・スポーツ指導を展開していくために必要な数々の「エッセンス＝本質」。その一つひとつを読者自らが導き出していくためのヒントを本書は用意する。

▼明星大学教職センター編『**教員を目指す君たちに受けさせたい　学校とつながる教職教養**』（A5・三〇〇頁・一八五〇円）学校とつなげ学校で生かせる教職教養。自然と教職教養が身に付く受験生必携書。現場教員にも役に立つ。長らく現場を指導してきた教員の教師力を学ぶ。

▼明星大学明星教育センター編『**自立と体験 1**』（A4・九二頁・一六〇〇円）自分の将来を想像し、理想や目的を明確にする！　『自立と体験 1』は、大学入学後すぐに始まる全学的な初年次教育科目。学部・学科を越えてのグループワークは、ワークシートを使った自己紹介から始まる。このテキストは自分自身を新鮮な目で見つめ直し、明日への新しいステップを発見する絶好の機会を提供する。

早稲田大学出版部

▼ロバート&ミシェル・ルートバーンスタイン著／不破章雄・萩野茂雄監訳『**天才のひらめき**』（A5判・四六四頁・二三〇〇円）アインシュタイン、ミッチェル、ガウス、スタインベック、ピカソ、バッハ……。数多くの天才と呼ばれる科学者や芸術家たちの創造的な仕事や作品の源となったのは、「ひらめき」や「直感」だった。私たちも、それぞれが本来持っている「ひらめき」「直観」を発揮すれば、仕事、研究、勉学の面において、創造的な成果を生み出すことができる。そのための思考・実践の方法を、13の処方箋にわけてわかりやすく解説。創造的な仕事に携わるビジネスマン、想像力たくましい研究者、夢見る大学生・高校生、必読の書。



関東学院大学出版会

▼副田あけみ著『**多機関協働の時代―高齢者の医療・介護ニーズ、分野横断的ニーズへの支援**』（A5判・二八二頁・三〇〇〇円）医療・介護ニーズをもつ高齢者、分野横断的ニーズをもち孤立する高齢者が増えていく超高齢社会。そこでは、異なる分野の多様な機関が協力し合う多機関協働が標準的な支援スタイルとなる。その効果的な方法・スキルはなにか、利用者参加はどうあればよいか。政策の流れと支援の実際を踏まえて、論じる。

〈目次〉第1章　介護政策と多機関協働／第2章　地域包括ケアシステムと多機関協働／第3章　多職種・多機関チームのチームワーキング／第4章　多職種チームと多機関チームの実際／第5章　多職種チームへの利用者参画／第6章　多機関チームと利用者参画／第7章　多機関ケースカンファレンスへの利用者参画

東海大学出版部

▼小野展嗣・緒方清人著『**日本産クモ類生態図鑑―自然史と多様性**』（B5判・七三〇頁・三五〇〇〇円）日本に記録されているクモ目六一科四七一属一六五九種のうち八五七種（一部、未記載種および新種を含む）のカラー生態写真を掲載。

▼小原良孝・多田政子・小野教夫・押田龍夫・岩佐真宏・川田伸一郎著『**染色体から見える世界―哺乳類の核型進化を探る**』（A5判・四〇〇頁・三八〇〇円）

▼飯島勇人・中島啓裕・安藤正規訳『**カメラトラップによる野生生物調査入門―調査設計と統計解析**』（A5判・三五六頁・四三〇〇円）

▼武田浩平・風間健太郎・森口紗千子・高橋雅雄・加藤貴大・長谷川克・安藤温子・山本誉士・小林篤・岡久雄二・武田広子・黒田聖子・松井晋・堀江明香著『**はじめてのフィールドワーク③日本の鳥類編**』（B6判・五二八頁・二七〇〇円）

名古屋大学出版会

▼田村均著『**自己犠牲とは何か―哲学的考察**』（A5判・六二四頁・六三〇〇円）日常の「自分を殺す」行いから極限状況まで、広く見られる自己犠牲――。なぜそれは可能で、いかに生み出されるのか。日本人戦犯裁判の事例を糸口に、西洋近代哲学では問えなかった問いを、人類学や心理学の知見をも参照しつつ考察する。

▼C・A・ベイリ／平田雅博・吉田正広・細川道久訳『**近代世界の誕生―グローバルな連関と比較 1780-1914**』上・下（A5判・三五六頁／四〇八頁・各四五〇〇円）一国史や地域史を超えて、西洋近代化とは異なる視点で世界史を問い直し、政治・経済・宗教から人々の衣食住まで、新しい「多中心的」な全体史を描ききるグローバル・ヒストリーの代表作。

▼高倉耕一・西田隆義編『**繁殖干渉―理論と実態**』（A5判・三八〇頁・五四〇〇円）すみ分けや資源分割など数多くの難問を統一的に説明できる、繁殖干渉。シンプルな枠組みでありながら、普遍的かつ強力であるこのメカニズムの全容を、タンポポやマメゾウムシなどの実証例を示しながら、初めて体系的に記述。

名古屋外国語大学出版会

▼佐原秋生・大岩昌子著『**食と文化の世界地図**』（新書判・二三六頁・一二〇〇円）世界を一四等分し、人間に直結する食べ物・食べ方をコンパクトにまとめた、画期的な「食文化地理学」の誕生。

▼名古屋外国語大学編『**世界教養72のレシピ**』（新書判・二五二頁・一二〇〇円）外国語、アート、国際政治、ネット社会、アニメなど人生のための教養カタログ。

▼城月雅大・編著『**まちづくり心理学**』（A5判・二〇二頁・一七〇〇円）まちづくりの研究者と環境心理学者が考える理論的・実践的・地域再生のエッセンス。

三重大学出版会

▼佐藤年明著『**「生きる力」論批判**』（A5判・二七三頁・二六八〇円）

読者にとって有り難いのは、戦後教育において「望ましい人間像」を教育目標に掲げる経過を広く展望できることにある。また「生きる力」を書名に掲げる既刊の著書四二点を網羅していちいち論評を加える第Ⅳ章は「生きる力」論の伝播と拡散の模様を確実に映し出している。〈目次〉はじめに―「生きる力」と学校教育の傲り／Ⅰ　一九九六中央教育審議会による「生きる力」提案／Ⅱ　「生きる力」という教育目標ラベルへの根本的疑問／Ⅲ　戦後日本教育政策史における「人間像的教育目標」の系譜／Ⅳ　中教審「生きる力」の伝播・浸透―「生きる力」を書名に含む著作の集成と検討／Ⅴ　「生きる力」に関する先行研究／Ⅵ　一九七〇年代の民間教育研究団体における「生きる力」論／おわりに―教育目標の名辞設定をめぐって／資料1　第十五期中央教育審議会第一小委員会議事録における「生きる力」への言及箇所／資料2　第十五期中央教育審議会総会議事録における「生きる力」への言及箇所。

京都大学学術出版会

▼佐藤郁哉編著『**50年目の「大学解体」20年後の大学再生**』（A5判・三八〇頁・三八〇〇円）政策的根拠と未来へのビジョンなしに進む「大学改革」に強く警告し、エビデンスにもとづく議論と徹底した帰納法的アプローチで、「高等教育政策における知的貧困」を乗り越え、大学再生のための理念的手掛かりを示す。

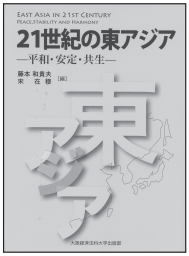
▼田中雅一・松嶋健編著『**トラウマ研究1　トラウマを生きる**』（A5判・六五二頁・七八〇〇円）トラウマを精神医学的あるいは心理学的な問題に安易に還元することを避け、文化人類学をはじめとする人文・社会科学的な視点から、多角的かつ総合的に考察することを目指したシリーズ。［全二巻］続刊＝2　トラウマを共有する（四月刊）

▼田余慶著、田中一輝・王鏗訳『**北魏道武帝の憂鬱―皇后・外戚・部族**』（A5判・四八八頁・五五〇〇円）五胡十六国時代を終わらせた政治メカニズムを解き明かす。後宮における世継ぎの母すなわち皇后殺し（子貴母死制）の存在こそが、拓跋部が諸勢力を駆逐し、新しい秩序の誕生を促すことができた所以であった。

大阪経済法科大学出版部

▼豊下楢彦・澤野義一・魏栢良編著『**北東アジアの平和構築―緊張緩和と信頼構築のロードマップ**』（A5判・三〇〇頁・二五〇〇円）〈目次〉第一部　北東アジア情勢と平和構築の課題／第二部　平和と安全保障における自衛権論の検討／第三部　市民による平和と人権の推進

▼藤本和貴夫・宋在穆編『**21世紀の東アジア―平和・安定・共生**』（A5判・三二四頁・二五〇〇円）〈目次〉第一部　平和と安全保障／第二部　持続可能な経済発展と環境保全／第三部　国際移住と共生社会



大阪大学出版会

▼深尾葉子著『**黄砂の越境マネジメント 黄土・植林・援助を問いなおす**』（四六判・三六二頁・二三〇〇円）黄砂は砂漠から飛んでくるという思い込み、植林への思い込みの枠組みをはずす。人の営みが作り出す景観と、その空間構造にある生活世界の理解なくしては成し得ない「境界を越える」黄土高原の緑化マネジメントを提唱する。

▼片山剛著『**清代珠江デルタ図甲制の研究**』（A5判・四五〇頁・六六〇〇円）明初に中国全土に施行された里甲制のうち、広東省珠江デルタにおいて清末・民国期まで特殊に存続した図甲制の制度的構造を考察。その構造を支えた社会的基盤を、江戸時代の村請制度との対比を行いながら明らかにする。

▼寺田健太郎作・乾摩耶子絵『**ねえねえ はかせ、月のうさぎは何さいなの？**』（A4判変型・三二頁・一七〇〇円）月のうさぎの年齢を科学者はどうやって調べるの？　学術論文を題材に、月に一番近いはかせが制作した、月の科学の絵本。

関西大学出版部

▼栗田和彦著『**シチリア海法序説**』（A5判・三二六頁・二七〇〇円）文明の十字路・中世地中海交易の要衝シチリアの拠点港メッシーナとトラパニに残る往時の海法を逐条的に分析・検討し、その実像に迫り、スペイン・ヴァレンシア海法との関連性やメッシーナ海法とアマルフィ海法（世にいうFoscarini本）との類似性など、中世イタリアないし地中海海法史研究上の意義・重要性を解明する。

▼山本幾生著『**落着と実在**』（四六判・四四八頁・三八〇〇円）二十世紀前半のドイツ・ナチ政権のもとで廃棄処分となったミッシュの『生の哲学と現象学』によるハイデガー批判を読解しながら、フッサールからハイデガーへの現象学に対してディルタイからジンメルを介したミッシュへの生の哲学を〈流れの中に線を引く解釈学〉として掘起し、現実が落着する生のリアリティの創出点へ至る。

関西学院大学出版会

▼中村牧子著『**著名人輩出の地域差と中等教育機会―「日本近現代人物履歴事典」を読む**』（A5判・三四四頁・四八〇〇円）「人の移動」を通して近代日本の姿を探る。

▼關谷武司編著『**開発途上国で学ぶ子どもたち―マクロ政策に資するミクロな修学実態分析**』（A5判・三〇八頁・三〇〇〇円）開発途上国を対象にした教育開発調査研究。

▼土居豊著『**司馬遼太郎『翔ぶが如く』読解―西郷隆盛という虚像**』（四六判・二〇八頁・一九〇〇円）司馬が描いた西郷隆盛の多面的な人物像とは。

▼国際連合広報局著／八森充翻訳／関西学院大学総合政策学部発行『**国際連合の基礎知識　第42版**』（A5判変型・四八〇頁・二六〇〇円）国連の仕組みと活動を理解するハンドブック。

▼水谷剛著『**日本財政における世代間格差の評価―世代会計の手法を拡張した分析**』（A5判・二〇六頁・四〇〇〇円）

▼中国モダニズム研究会編『**ドラゴン解剖学・竜の生態の巻　中華生活文化誌**』（A5判・二三〇頁・二二〇〇円）中華圏に暮らす一般市民の生活様式を紹介。

広島大学出版会

▼牧貴愛著『**タイの教師教育改革　現職者のエンパワメント**』（A5判・二一四頁・五五〇〇円）タイの教育現場及び教育行政機関に長期滞在しておこなった現地調査に基づく研究書。二〇一二年刊。▼木下正俊著『**わが国の金融システム改革と法制整備**』（A5判・四〇九頁・三四〇〇円）わが国の金融システム改革を金融の効率化・高度化・融合化・安定化の観点から多面的に捉え、法的インフラ整備の取り組みを検証する。二〇一五年刊。▼松本陽正著『**「異邦人」研究**』（A5判・二七六頁・二二〇〇円）アルベール・カミュ『異邦人』を緻密なテキスト読解や比較文学的アプローチなどを用いて、醸成された解釈の定説に修正を迫る。一般読者に向けては小説の読み方の一例を示し、小説読解のワクワク感を提供する。二〇一六年刊。

九州大学出版会

▼嶋田洋一郎訳『**ヘルダー民謡集**』（四六判・八一〇頁・一〇〇〇〇円）民謡の価値を見直し、世界文学の理念を体現。▼吉井亮雄著『**ジッドとその時代**』（A5判・六七四頁・九〇〇〇円）書簡や日記などの未刊文献を駆使して、同時代人と結んだ多様な関係を鮮明に描き出す。▼神庭重信著『**思量と願い―精神医学の風景**』（四六判・二八〇頁・二四〇〇円）うつ病・双極性障害研究と臨床の第一人者による論考集。▼藤井康子著『**わが町にも学校を―植民地台湾の学校誘致運動と地域社会**』（A5判・三七八頁・五四〇〇円）教育機会・学歴取得と地域振興にかける想い。▼叶堂隆三著『**カトリック信徒の移動とコミュニティの形成―潜伏キリシタンの二百年**』（A5判・四五〇頁・八〇〇〇円）信仰と生業を基とする信徒の暮らしと移住の背景を社会学的に解明。▼香室結美著『**ふるまいの創造―ナミビア・ヘレロ人における植民地経験と美の諸相**』（A5判・二三八頁・三六〇〇円）ドイツ人入植者の衣服を模倣し継承してきたヘレロ人の美意識とファッション。

編集後記

▼昨年二月に「築地本マルシェ」というイベントが開催された。朝日新聞社などが主催したブックフェアである。大学出版部協会はそこで、鼎談「学術書を読む――「専門」を超えた知を育む」を開いた。三中信宏先生、三浦衛さん、そして京都大学学術出版会の鈴木哲也さんが、「学術」や「本」、「読書」に関するおもしろさを語りあった。本号の特集はその延長にある。▼そもそも「学術書」という定義の難しいジャンルは、読者が限られてしまう。前出の鈴木さんは著書『学術書を書く』（京都大学学術出版会）で、「二回り、三回り外」の読者層を狙うことを説くが、専門性の高い研究領域ではそれがなかなか難しい。▼「読書」については本誌一〇三号（二〇一五年五月）でも特集を組んだ。「専門外の専門書を読む」読書会」などのレポートを掲載したが、現在ではさらに多様な読書形態が生まれている。▼今号では加えて、学術に関する壮大な構想、大学の授業内での実践を示すことができた。あらためて学術書をめぐる読書について考えるきっかけになれば幸いである。（M）

【50音順】2018年12月1日現在

大同印刷㈱	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550
ダイニック㈱	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 御成門ビル TEL 03-5402-1811
㈱太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821
㈱太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111
㈱竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617
㈱東京弘報社	〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町1-2-1 TEL 03-3291-1771
㈱とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200
東光整版印刷㈱	〒135-0006 東京都江東区常盤2-12-15 TEL 03-3632-0801
東洋美術印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-6-2 TEL 03-3265-9861
㈱トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288
図書印刷㈱	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700
㈱日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431
㈱日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-5255-2198
日本宣伝販売㈱	〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278 TEL 048-620-1021
萩原印刷㈱	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12 TEL 03-3811-4272
㈱博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711
藤原印刷㈱	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191
㈱平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301
㈱堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5 TEL 048-422-0029
㈱毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340
誠製本㈱	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5 TEL 03-3967-3952
㈱遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325
㈱読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111
㈱ライトコミュニケーション	〒101-0035 東京都千代田区神田紺屋町11 岩田ビル5F TEL 03-3251-7571

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。なお、「賛助会員」に関するお問い合わせは、協会事務局までお寄せください。

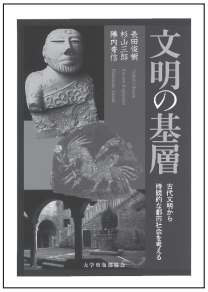
一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

㈱朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 TEL 03-5540-7749
亜細亜印刷㈱	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154 TEL 026-243-4858
㈱アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408 TEL 03-3235-1360
尼崎印刷㈱	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 TEL 06-6494-1122
㈱ALE	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階 TEL 03-5652-8627
王子製紙㈱	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 TEL 03-3563-7072
カクタス・コミュニケーションズ㈱	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-4-1 TUG-Iビル4F TEL 03-6261-2290
㈱加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-15-6 K-STAGE TEL 03-3261-8281
城島印刷㈱	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102
㈱紀伊國屋書店	〒153-8504 東京都目黒区下目黒3-7-10 TEL 03-6910-0510
㈱クイックス	〒456-0004 愛知県名古屋市熱田区桜田町19-20 TEL 052-871-9190
㈱粂川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7 TEL 03-3943-9811
㈱クリムゾンインタラクティブジャパン	〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F TEL 03-3525-8001
港北出版印刷㈱	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 TEL 03-5466-2201
三松堂㈱	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階 TEL 03-6823-5360
三美印刷㈱	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8 TEL 03-3803-3131
三立工芸㈱	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F TEL 03-3261-5171
三和印刷㈱	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1 TEL 026-285-2300
信濃印刷㈱	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 TEL 03-3237-3601
㈱渋谷文泉閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7 TEL 026-244-7185
㈱眞興社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2 TEL 03-3462-1181
新日本印刷㈱	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 TEL 03-3269-3611
㈱精興社	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9 TEL 03-3293-3021
創栄図書印刷㈱	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766 TEL 075-255-2288

大学出版部協会・ブックレット

大学出版部協会 発行／東京大学出版会 発売【2015年7月刊】

2014年5月に千代田区立日比谷図書文化館で開催された市民シンポジウム「文明の基層」(総合地球環境学研究所・京都大学学術出版会・大学出版部協会 主催／活字文化推進会議 後援)の内容をブックレット化しました。



長田俊樹　おさだとしき(総合地球環境学研究所名誉教授、神戸市外国語大学客員教授)
杉山三郎　すぎやまさぶろう(愛知県立大学大学院特任教授、アリゾナ州立大学人類学学部教授)
陣内秀信　じんないひでのぶ(法政大学デザイン工学部教授)

文明の基層

古代文明から持続的な都市社会を考える

A5 判・80 頁／定価（本体 1,200 円＋税）ISBN978-4-13-003152-3

古代都市のイメージは大きく変わりつつある。インダス文明の諸都市のゆるやかなネットワーク、中米の古代最大都市テオティワカンでの新しい発見。人はなぜ都市を作ってきたのか、その歴史的基層を中世ヨーロッパのヴェネツィアと比較しながら、改めて都市の魅力と未来への可能性を探る。大学出版部協会ブックレット第3弾。

〈主要目次〉

第一章　インダス文明：ネットワーク都市――中央集権的文明観を覆す（長田俊樹）
「大河文明」は本当か？―広大なインダス文明／インダス文字とインダス印章／草原の遺跡、海岸沿いの遺跡―大河から離れて／砂漠の遺跡の謎／「城塞」と「パスポート」―都市ネットワーク論に向けて／墓から見えるもの―格差の不在／砂丘が先か、文明が先か／インダス文明は大河文明ではなかった―農業と水害の視点／古代文明観を見直す―「穀物倉」と「アーリア人侵入説」／文明の衰退について考える／ゆるやかなネットワークの存在／都市社会をどう見るか―中央集権的文明観からの解放

第二章　新世界最大の古代都市テオティワカン：英知の集積としての都市（杉山三郎）
閉ざされた空間の多様性／文明の萌芽／認知能力＝知恵こそが、文明の基盤をなす／中規模都市ができ始める／完全計画都市、テオティワカン／多くの人を迎える巡礼地として／暦と数の体系／「太陽のピラミッド」と「月のピラミッド」の二元性／墓は語る／古代人の交流―物を集めるネットワーク／文明の確立から崩壊へ―伝わり、つながる文明の諸要素

第三章　水都ヴェネツィア：交易都市から文化都市へ（陣内秀信）
水と共生する町、ヴェネツィア／逆・中央集権的構造都市―複雑に交差する水と陸のネットワーク／都市を解読する／交易都市から文化都市へ／オリエント志向と柔軟性／分散的都市から統合的都市へ／なぜ都市に人が集まるか／城壁の無い町／都市モデル再考／川が結ぶネットワーク／水車の活用／考古学調査がヴェネツィアのイメージを変える／ヴェネツィアの食と産物のネットワーク／ラグーナは自然・環境・歴史の宝庫―文化都市から環境都市へ

MINERVA
知の白熱講義
2

野田秀樹×鎌田浩毅

劇空間を生きる

知的好奇心ゆさぶる
白熱シリーズ、第2巻

未来を予見するのは
科学ではなく芸術だ

劇作家・演出家・役者
——躍動する異才、同級生の火山学者と大激談！

“知の伝道師”鎌田浩毅氏が聞き手となり、野田秀樹氏の半生に迫る。高校時代の同級生が時を経て向かい合うとき、芸術家 VS 科学者の枠を超えた知の扉がひらく。

四六判美装カバー274頁　2200円

MINERVA知の白熱講義　シリーズ第１巻

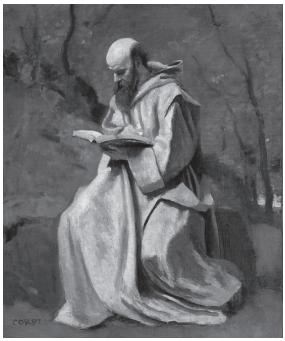
山極寿一
×
鎌田浩毅

ゴリラと学ぶ

家族の起源と人類の未来

四六判美装カバー
328頁　2200円

ミネルヴァ書房　〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町１　☎075-581-0296　宅配可/価格税別
E-mail eigyo@minervashobo.co.jp　URL http://www.minervashobo.co.jp/



表紙写真：コロー「座して読書する白い修道士」
18世紀，油彩，ルーブル美術館蔵
(Public Domain)

※季刊『大学出版』は、大学出版部協会の
公式HPでも、PDF版を全文無料で
ダウンロードいただけます

大学出版117号（2019年冬）
2019年1月10日発行
頒価100円（〒共）

発行所：一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091　FAX 03-3511-2092
E-mail：mail@ajup-net.com
URL：http://www.ajup-net.com/

表紙デザイン：阿部卓也

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

■ 北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

■ 弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

■ 東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

■ 流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-60-1167　FAX 0297-60-1165

■ 聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

■ 慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

■ 専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

■ 大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-3918-7311　FAX 03-5394-3038

■ 玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

■ 中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

■ 東京大学出版会
〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991

■ 東京電機大学出版局
〒120-8551 東京都足立区千住旭町5番
TEL 03-5284-5385　FAX 03-5284-5387

■ 法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

■ 武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

■ 武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

■ 明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-593-0192

■ 早稲田大学出版部
〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551　FAX 03-3207-0406

■ 関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906　FAX 045-785-9572

■ 東海大学出版部
〒259-1292 平塚市北金目4-1-1
TEL 0463-58-7811　FAX 0463-58-7833

■ 名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

■ 名古屋外国語大学出版会
〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503　FAX 0561-75-1723

■ 三重大学出版会
〒514-8507 津市栗真町屋町1577
三重大学総合研究棟Ⅱ 3階
TEL 059-232-1356　FAX 059-253-3095

■ 京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

■ 大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129　FAX 072-941-9979

■ 大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1617

■ 関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238　FAX 06-6389-5162

■ 関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002　FAX 0798-53-5870

■ 広島大学出版会
〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2
広島大学図書館内
TEL 082-424-6226　FAX 082-424-6211

■ 九州大学出版会
〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ305
TEL 092-833-9150　FAX 092-833-9160